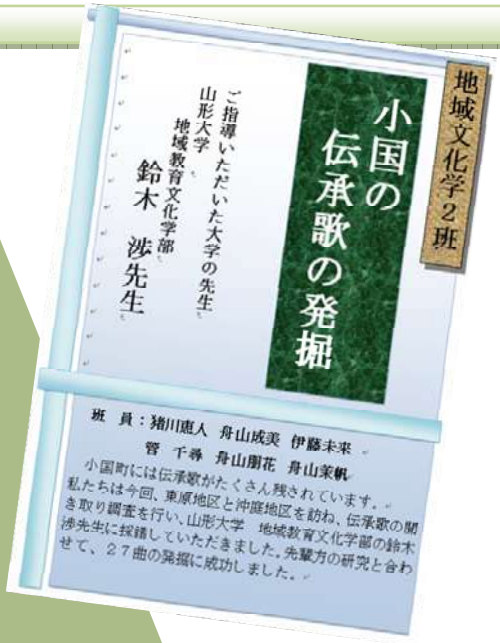
平成二十一年度

地域文化学研究報告書



山形県立小国高等学校

『地域文化学』研究報告書の発刊によせて

山形県立小国高等学校長　齋藤裕司

本校は、小国町の教育の根幹である小中高一貫教育の最終学校段階を担っている町内唯一の公立高校です。その一貫教育では、目標に「郷土の歴史や文化に学び、自然環境との共生を図りながら町づくりに貢献できる『心豊かで創造性に富む人材』を育成する」ことを掲げています。そのため、町の小学校・中学校・高校では、それぞれの校種に応じて、工夫を凝らした地域学習に取り組んでいます。

この『地域文化学』は、本校における地域学習の名称で、第１学年で実施している「総合的な学習の時間」の呼び名です。小国町の小学校・中学校が取り組んでいる地域学習を「白い森学習」と呼んでいますが、その高校版が『地域文化学』になります。特に、高校段階においては、大学・短大の専門家の先生のご指導をいただきながら、この小国町の自然、歴史、文化、産業などについて、より専門的な切り口で、また幅広い視野から調査･研究を進めています。この研究報告書は、これらの内容と生徒の提言・提案などを含めてまとめたものですが、これとは別に「町民報告会」を開催して、一般町民の皆様を対象にした成果発表も行っています。

生徒たちは、この『地域文化学』の多彩な学習活動を通して、多くの人々と出会い、温かな交流を深め、あらたな町の良さを発見しながら、将来の生き方について思いを巡らせる貴重な経験を積み重ねています。この学習は、生徒にとって、知識だけでなく豊かな心を育むとともに、将来も課題意識を持って、地域社会の一員として行動しようとする姿勢や態度を培う大切なものになっています。

おわりに、高校１年生という高校教育においては入門段階にある生徒たちを、熱心かつ懇切丁寧にご指導いただいた各先生方に感謝申し上げますとともに、生徒たちの取材に快く応じてくださった多くの皆様に、心から御礼を申し上げます。

これからもご指導ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

INDEX

学習の大テーマ ○学習発表テーマ	大 学 指 導 教 官	班　員　名 校内担当者（教科等）	Page
自然や地域社会の構造分析 **①人と人のつながりを視る**	山形大学工学部 大学院理工学研究科 **准教授　田中 敦 氏**	OP 木村勇貴・齋藤　涼・舟山 祥平 見川尚輝・佐藤良樹・二藤部晋馬 **＊佐原　俊博（理科）**	1
小国の伝承歌の発掘 **②小国の伝承歌の発掘・披露**	山形大学 地域教育文化学部 文化創造学科 **教 授　鈴木　渉 氏**	猪川恵人・菅　千尋・　舟山朋花 舟山成美・伊藤未来・OP 舟山茉帆 **＊船山　真琴（英語）**	5
民俗芸能・民俗行事・庶民信仰・伝統工芸 **③小国の昔物語について**	東北芸術工科大学 東北文化研究ｾﾝﾀｰ **准教授 菊地和博 氏**	安達桃子・佐藤しおり・色摩七海 OP 舟山拓朗・峰田 祐輔 ・渡部恭兵 **＊阪野　保憲（実習）**	9
小国の魅力を再発見 **④0guu 第 2 弾の発行**	東北公益文科大学 公益学科 **准教授 呉　尚浩 氏**	今　唯乃・OP 斎藤彰人・嶋貫湧馬 中塚　悠・ 舟山健太郎・山口拓実 **＊小関　雄一（数学）**	１４
飯豊山の歴史・民俗学 **⑤飯豊山の歴史** **飯豊山の登山道**	米沢女子短期大学 日本史学科 **講 師 原 淳一郎 氏**	齋藤克哉・渡部竜平・OP 伊藤赤威 八幡秀勝・小嶋浩都・　齋藤彰人 **＊市川　光紀（歴史）**	１９
豊かな自然と小国の人々 **⑥豊かな自然と小国の人々**	山形短期大学 総合文化学科 **教 授 大川健嗣 氏**	安部智大・OP 猪野本気・佐野　聡美 玉垣智裕・　長瀬　茜・舟山美乃里 **＊横山江梨子（国語）**	２３
小児看護学 **⑦遊びの大切さを知り、子どもが健康な街づくりをしよう**	新潟医療福祉大学 健康科学部看護学科 **講師 松井由美子 氏**	長谷川由美・OP 平田美咲・伊藤愛里 遠藤菜津美・　齋藤真莉子・渡部日生 **＊大泉裕美子（家庭）**	２８

OP：ﾊﾟｿｺﾝ操作

山形県立小国高等学校１年　地域文化学

「人と人のつながりを視（み）る」

班員　木村 勇貴　齋藤 涼　舟山 祥平
見川 尚輝　佐藤 良樹　二藤部晋馬

１．テーマ設定の理由（目的）

人と人のつながりに注目し、身近な地域社会の構造を、ネットワーク分析の手法を使い分析・数値化し、その特徴を活かした効果的な情報伝達法などを提案する。

２．研究の概要

（１）複雑ネットワークの簡易モデルとして、国内航空路線をもとに分析の仕方を体験する。
（２）実際の調査対象である町内の人と人のつながりについて、データ収集し分析をする。

３．研究の結果

（１）複雑ネットワークの分析法

① 複雑ネットワーク

インターネット、道路網、送電線、脳内の神経細胞など、あらゆるものが複雑なネットワークを構成している。ネットワークとは一般に、ノード（頂点）とリンク（枝）からなる。例えば、インターネットでノードに相当するものはルータ、リンクに相当するものはルータをつなぐ配線である。また、いくつかの点（ノード）を適当に打ち、それらを適当に線（リンク）でつないだものもネットワークとなる。

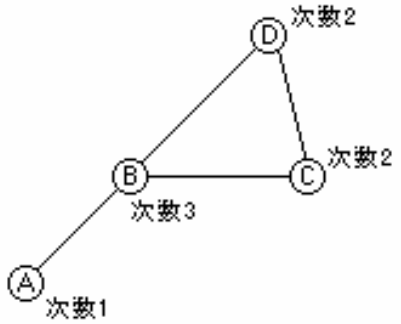
これらの例でのリンクは全て物理的な線であらわされるが、それ以外にも関係性が見出されればすべてネットワークとなる。例えば、一人の人間をノード、その人の友人・知人の関係をリンクと見なせば、それは友人・知人のネットワークとなり、人間関係などを知る手がかりとなる。今回私たちが研究しているものは、まさにこれである。

このように、さまざまなネットワークを分析することで効果的な情報伝達や効率的な物流網づくりなどに役立てることができる。

② ネットワークの要素

次数

１つのノードから伸びているリンクの数。例えば図のノード B の場合、つながっているリンクは 3 本、つまり次数は 3 となる。次数分布（すべてのノードの次数の分布）や平均次数（すべてのノードの次数の平均）などを調べることで、ネットワークの特徴を知ることができる。



平均最短経路長Ｌ

適当に選んだ２つのノード同士の最短経路長（ノード同士が何ステップでつながるのか）を、すべての組み合わせについて調べ平均したもの。Ｌが小さいネットワークほど関係性が密接であるといえる。例えば図の場合の最短経路長は、AB 間は 1、AC 間は 2、AD 間は 2、BC 間は 1、BD 間は 1、CD 間は 1 となり、平均最短経路長Ｌ＝1.33 となる。

クラスタリング係数Ｃ

ノード同士が実際につながっているかをあらわす指標である。友人関係のネットワークでは、友人の友人が友人である確率を意味する。

（２）国内航空路線の分析（ＡＮＡ・ＪＡＬの地方路線ネットワーク分析）

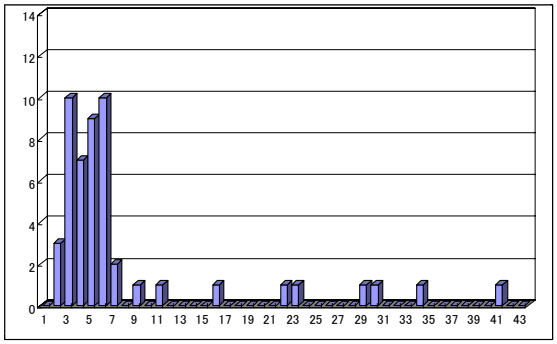
① 調査方法

全日空ＡＮＡと日本航空ＪＡＬの地方路線ネットワークの分析のため、各航空会社の時刻表や路線図をもとに空港間のつながりを調べ、次数分布を作成し、平均次数および特徴的な地域における平均最短経路長Ｌを算出する。

② 調査結果

《全日空ＡＮＡ》

次数分布（横軸：次数／縦軸：空港数）

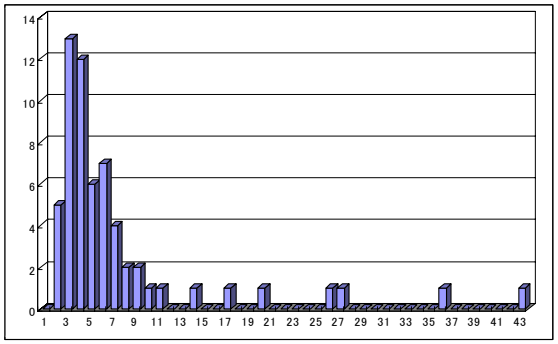


平均次数 6.73

平均最短経路長Ｌ=1.37（北海道内）

《日本航空ＪＡＬ》

次数分布（横軸：次数／縦軸：空港数）



平均次数 5.58

平均最短経路長Ｌ=1.42（沖縄諸島内）

③ 考察

どちらの航空会社とも、都市部の空港は次数が大きく、地方の空港は次数が小さい。

平均次数はＡＮＡの方が大きいことから、１つの空港からつながっている空港の数はＡＮＡの方が多いことがわかった。

次数の小さい部分の分布を比較すると、ＪＡＬは次数 2～3 の空港が突出して多いのに対し、ＡＮＡは次数 2～5 の空港が数ヶ所ずつ分布している。これは、ＪＡＬの方が離発着数の少ない地方路線に多くかかわっていることになる。このことが、現在問題になっているＪＡＬの経営不振の原因の一つだと考えられる。

次数が一番多いのはどちらも東京（羽田空港と成田空港）である。羽田空港をハブ化することで多くの地方都市に簡単にアクセスできるというメリットがある。

また、ＡＮＡは北海道内の、ＪＡＬは沖縄諸島内の路線が充実している。そこで、それぞれの平均最短経路長Ｌを調べたところ、ＪＡＬを利用しての沖縄諸島内の移動より、ＡＮＡを利用しての北海道内の移動の方が、空港間の関係が密接つまり乗換えが少なくて済むことがわかった。

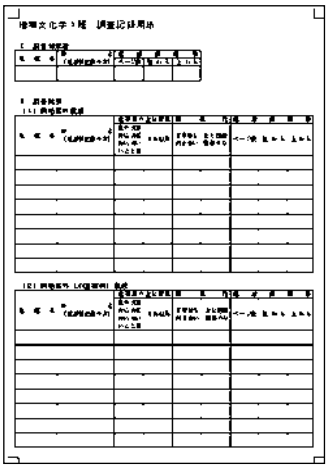
（３）小国町内の人と人のつながりの分析（血縁ネットワーク分析）

① 調査方法

小国町内の古くからある集落（沖庭地区）と新興住宅地（あけぼの・東原地区）を対象に、血縁関係に注目した「人と人のつながり」を聞き取りによって調査する。

血縁関係のつながりがある家同士の集団を１つのコミュニティーとみなし、特定の地域におけるコミュニティーの規模（何軒が血縁関係でつながっているか）とコミュニティー数（いくつのグループに分けられるか）を調べる。

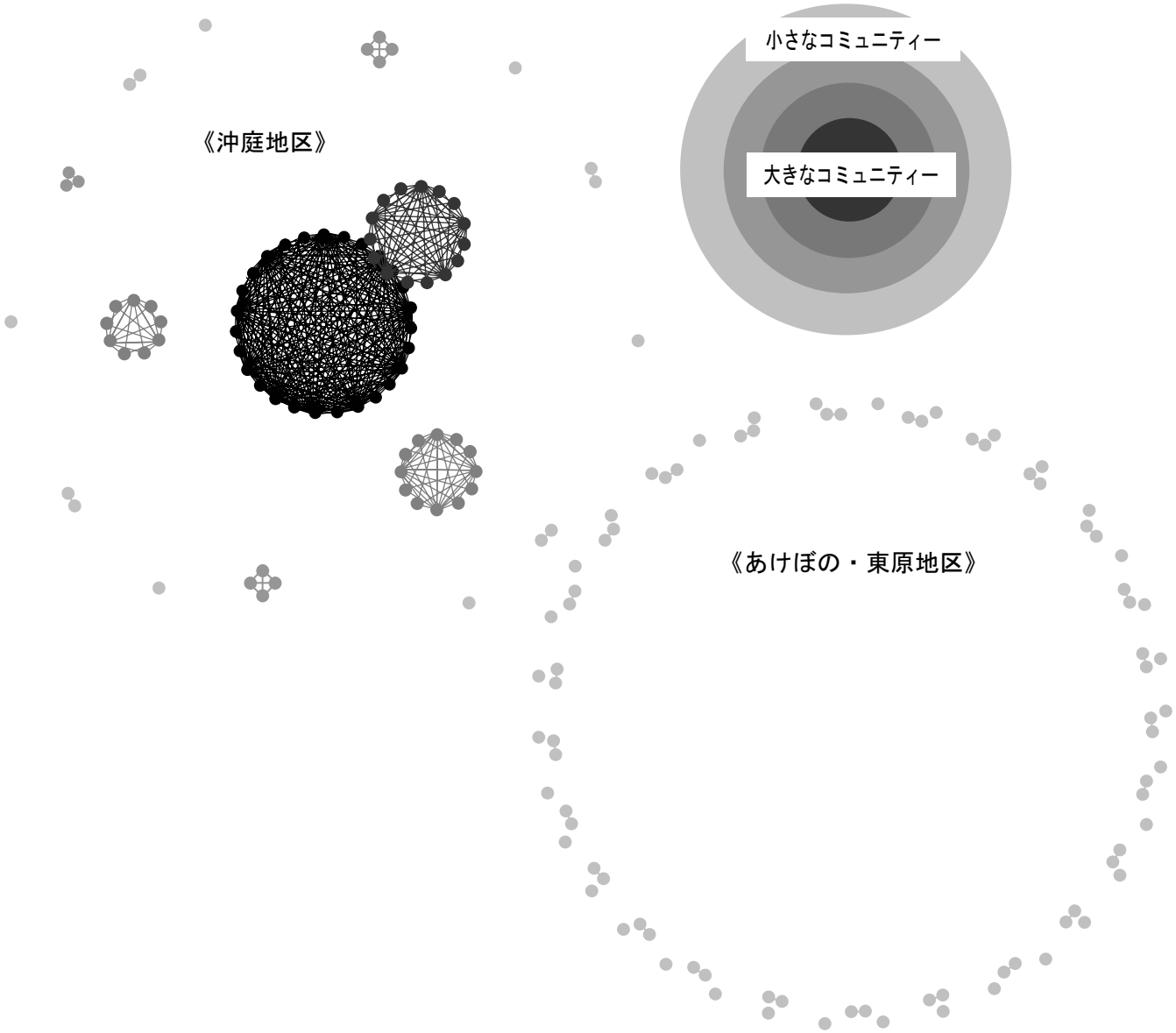
調査結果の分析の際には、個人情報に配慮し個人名は用いず、すべて電話帳を利用し記号化処理を行った。



② 調査結果

コミュニティーの規模	コミュニティー数	
	《沖庭地区》	《あけぼの・東原地区》
1	6	34
2	4	25
3	1	0
4	2	0
9	1	0
12	1	0
15	1	0
27	1	0
計	17 （調査総軒数 88）	59 （調査総軒数 84）
コミュニティーの規模の平均	5.2 （88÷17）	1.4 （84÷59）

コミュニティーの規模と分布図



③ 考察

小国町内に古くからある沖庭地区のコミュニティーの規模は平均で 5.2 軒と、あけぼの・東原地区の 4 倍近い。また最大で、27 軒もの巨大なコミュニティーを形成していることもわかり、沖庭地区は同地区内での人の人とのつながりが非常に濃厚であることがわかった。

この理由として、昔から、同じ地区内での結婚などが多く、他の地区に移り住むことがあまりなかったために、結果として親戚同士が同じ地区内に住んでいることが考えられる。

また、沖庭地区の方より、地区外（町内）の血縁関係についても教えていただいたところ、沖庭地区との血縁関係の比較的多い地域は、緑町・岩井沢・兵庫舘などの町の中心部が比較的多いが、他の地域については特に特徴は見られなかった。

新興住宅地での地区内の人のつながりは、コミュニティーの規模が小さいものが多く、平均でも 1.4 軒であった。

新興住宅地でのつながりが薄い主な理由としては、聞き取り調査の際に住民の方から伺ったものとして、以前、空いていた土地（今のあけぼの地区など）を町が整備し、違う地区から移り住んだこと、また、地区内にある高齢者マンションにお年寄りをあずけるために、違う地区から引っ越してきたなどの理由も挙げられた。

４．まとめと感想

私たちはネットワークについて学習し、実際に自分たちで国内航空路線や町内の血縁ネットワークについて調べることができた。

国内航空路線のネットワークを分析したところ、現在話題になっている問題の原因を探ることができた。このようなことにもネットワークの分析が役立っているのだとわかった。

血縁ネットワークの分析では、２つの地区で大きな違いを見出すことができた。血縁関係の濃い地域では、それぞれのコミュニティー内での情報の伝達速度が速いと思われる。そのため、災害時などに迅速な対応ができるため、コミュニティー内で簡単に助け合えることが魅力である。これは、血縁ネットワークが薄い新興住宅地では難しいだろう。他に、同じ地区内に身内の人が居ることが多いため、冠婚葬祭の時などは親戚が集まりやすい。また、情報の回覧にはこのネットワークを利用するのが効率的だと思われる。

人と人の関係性が薄くなっている今だからこそ、このような小国町内の貴重なつながりを、今後の町づくりに活かしてもらいたい。

今回、聞き取り調査のために、広い地区を自転車で移動しながら１軒１軒説明しなからまわった。これはとても大変な作業で、特に沖庭地区は家と家が離れているため次の家に行くまで時間がかかってしまい、スムーズに調べることができず、事前に段取りを考えておくことが大事だと感じた。せっかく行っても、説明不足からか協力を断られる場合もあり残念なこともあったが、逆に励ましていただくこともあり、やりがいはあって終わってみると達成感があった。また、調査後も電話帳で１つ１つ調べなおしてデータ化するのにも時間がかかったが、自分たちで考えた方法で処理をすすめることができ、これまで誰も調べることがなかった貴重な資料を得ることができた。

最後に、ご指導いただいた田中先生、協力いただいた地域の皆さん、大変ありがとうございました。

山形県立小国高等学校１年　地域文化学

「小国の伝承歌」

班員　猪川恵人　伊藤未来　菅千尋　舟山朋花　舟山成美　舟山茉帆

１．テーマ設定の理由

小国町には、いわゆる“伝承歌”といわれる歌が数多く残されている。それは、盆踊り歌や祭礼の時に歌われる伝統的な歌にはじまり、子どもたちの手遊び歌まで幅広く歌い継がれてきたものである。そのなかには、小国町特有の歌も少なくないと思われる。

これらの発掘と保存など、継承するための努力がこれまでにもなされてきていた。平成 11 年に『小国の文化財を伝承する会』によって編纂された「小国の文化財」((株)ぎょうせい)と題する冊子は、そのもっとも有力な資料となっている。しかし、残念なことにこの冊子は、歌詞のみの採取と保存にとどまっているため、歌詞は参照できるが、メロディーすなわち歌として再現することが不可能となっている。

そこで私たちはまず、この資料「小国の文化財」に掲載されている歌詞を手がかりとして、これを記憶している町民の方々にご協力いただき、メロディーすなわち歌を採取し、楽譜として起こし、資料として編纂し保存を試みることにした。そしてこの活動をとおし、私たち自身が小国町に残された伝承歌を採取・記録するなかで、これらを知り、より理解を深め、さらに歌えるようにしたいと考えた。

こうした活動をとおして、小国の伝承歌の文化を引き継がれていくような努力によって小国の町を誇りに感じるとともに、歌そのものが確実に、そして大切に保存されることを目指すことにした。

２．調査の概要

（1）　聞き取り調査
（2）　採譜
（3）　楽譜集作成
（4）　唄練習

６月２日　加藤とよさん宅にて

６月３０日　東原公民館にて

７月３０日　仁科清実さん宅にて

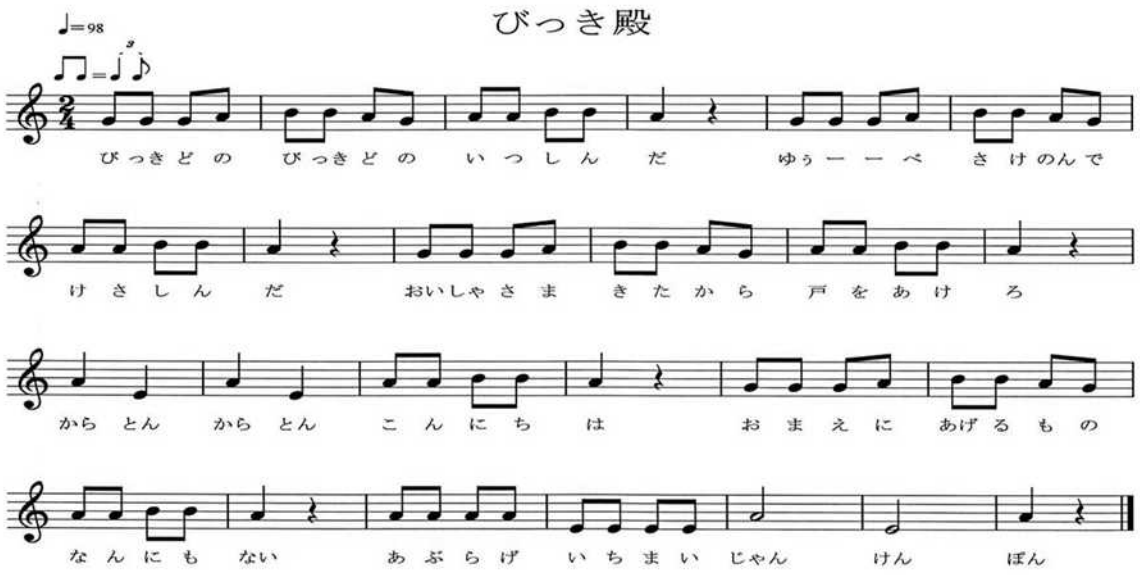
３．調査の結果

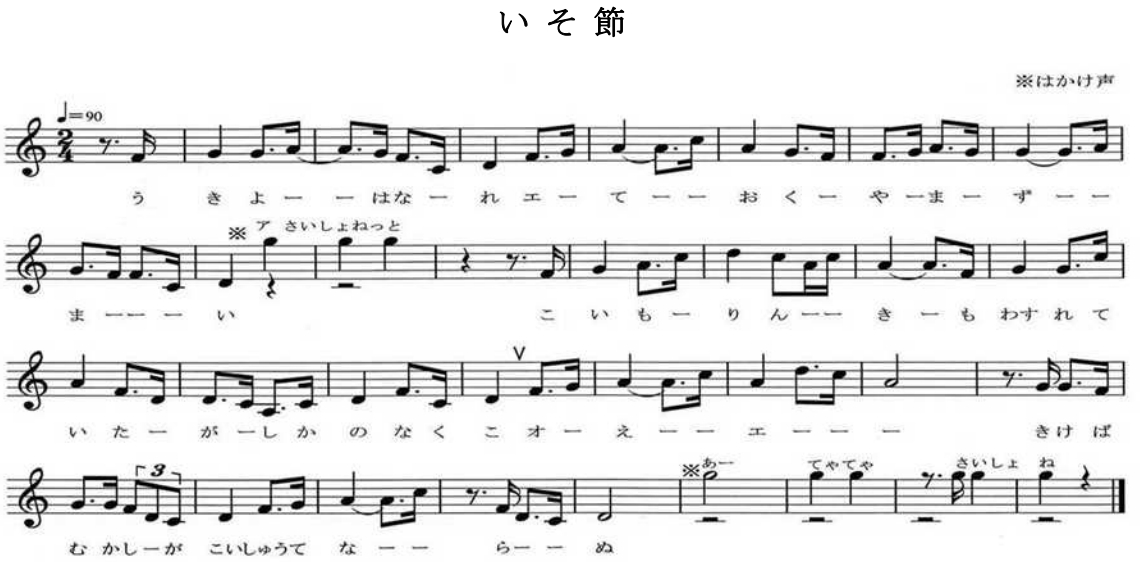
（1） 地域の方々（東原地区、沖庭地区、岩井沢地区）に小国に伝承されている歌を聞き取り調査した。聞き取り調査では、ICレコーダーで音声を録音。データをメールに添付して鈴木先生にお送りし、採譜していただいた。

（2）「小国の文化財」に掲載されているもの、いないもの、昨年一昨年の先輩方の調査結果も含めると、合計25曲の採譜に成功した。

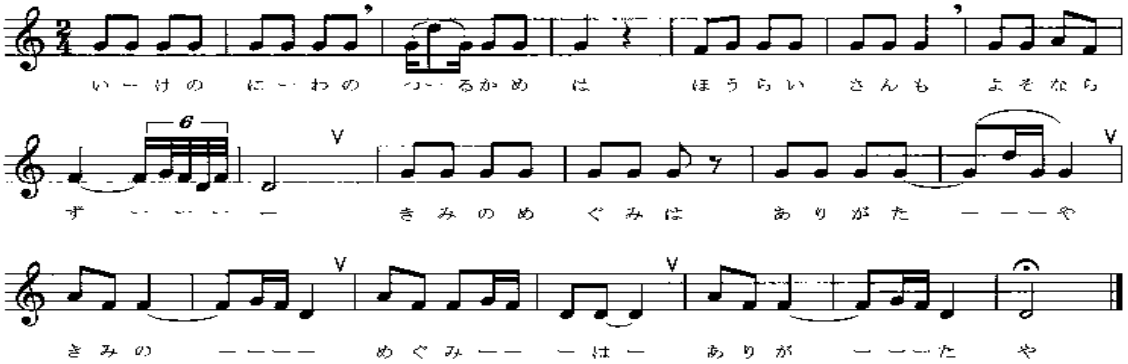
（3） それぞれの曲にまつわるエピソードや、どんなときに歌われるかなどを調査し、別冊の楽譜集としてまとめた。

唄を実際に練習した。（びっき殿、いそ節、謡曲：鶴亀・松坂）

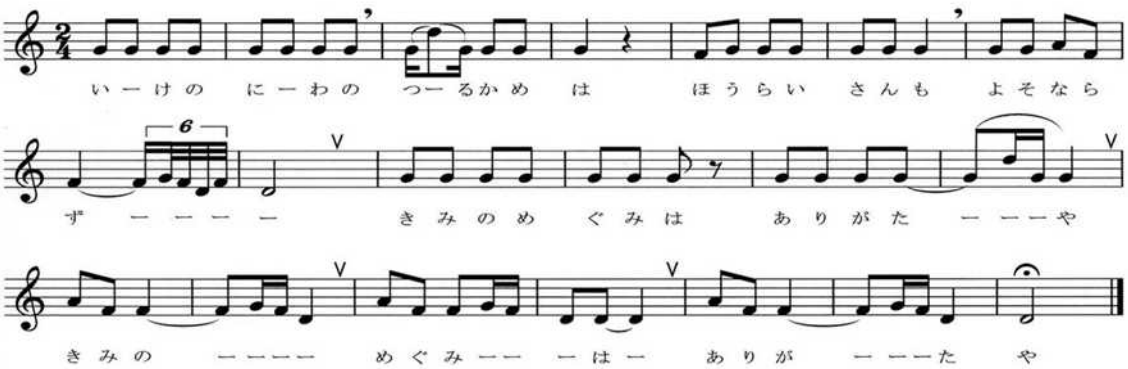




鶴　亀



松坂・鶴亀



４．成果と今後の課題

今回、これまでに様々なお年寄りのお宅に伺わせていただいたときに、とても喜んでいただきました。なかには「時間があれば是非訪れて曲を教えたい」と言ってくださる方もいました。そこで私たちは、地域の方やお年寄りの方々とのつながりが、いかに大切なものであるかということを改めて確認しました。

伝承歌というものは無形の文化遺産であり、口伝えでなければ歌い継がれることもなく、そこで消えてしまうものです。今回も伝承歌を歌える人が少なく、捜し出すことに大変苦労しました。あと約 10 年もすれば、状況はさらに悪化することは避けられないのではないかと思われます。今、伝承歌は途絶えつつあり、絶滅の危機に瀕しています。一度途絶えしまったらもう二度と復活させることはできません。冊子、「小国の文化財」にも歌詞はありますが、楽譜に起こせる人はなかなか居ないと思うので、歌詞は残りますが曲は残らず、実質そこで唄は消えてしましまいます。そこで私たちは鈴木渉（山形大学地域教育文化学部教授）先生にお力をお借りして、採譜して頂き、唄を冊子として残すよう試みました。

国が認める文化財にはまだまだかもしれませんが、私たちにとってはそれ位価値のあるものになったと感じています。

小国町の教育長さんも私たちの活動にとても興味を示していただき、このまま小国町独特の文化遺産が消えてしまうのはとても残念であるので、形として是非残して欲しいとの事で、別冊の楽譜集も作成させていただけることになりました。

今回の課題として、まず、これまでに3年間の月日をかけて 27曲を発掘しましたが、実際、「小国の文化財」にあるものだけでなく、まだ発掘されていないものもあるのではないかと思いました。これには、継続してやって行くことが重要なので、是非私たちの活動を来年の１年生に継いでもらいたいと感じました。
そして、私たちは普段、地域の方やお年寄りの方々と接する場面はあまりなく、自ら接する事もあまりないと思います。ですが、今回の学習で採譜できたのはお年寄りの方々のお陰であり、もし、今回の様に快く協力して下さる方が居なければ、わたしたちはここまで成果を挙げることは出来なかったでしょう。
そこで、私たちは、お年寄りが持っている知恵や文化に、もっと強い関心を寄せていかなければならないと強く思いました。

私たちは小国町の一員であることに誇りと責任を持ち、こうやって伝えていかなければ失われてしまう文化を守っていく責任があるのではと考えました。

これらが、次世代に伝えられることなく失われる事のないよう、私たちがくい止めることによって、私たちは育ててもらった小国町に少しは恩返し出来たのではと思っています。今後も地域文化学でこういった活動を続け、少しでも多く消えかけている文化遺産を守っていって欲しいと思いました。

そして、今回の伝承歌を残し、私たちの子供達やその子供達、更にはずっとその先まで伝えていけたらいいと思っています。この活動に取り組むなかで、私たちの心に大きなものを残し、とても大きな成果を得ました。

最後に、今回聞き取り調査に快く協力してくださったお年寄りの方々や、何も分からなくて活動が遅い私たちを優しく導いて下さり、忙しいなか、できるだけ早く楽譜を渡してくださるようご配慮下さった鈴木渉先生に、とても感謝しています。本当に有難うございました。

小国町の昔物語について

山形県立小国高等学校１年

峰田 祐輔　舟山 拓朗　渡部 恭兵

安達 桃子　色摩 七海　佐藤しおり

１．テーマ設定の理由

私たちはここ小国町に住み生活している中で幼い頃より昔物話や言い伝えなどを聞いてきました。都市伝説といわれる学校の怪談話やその地区の成り立ちなどを話し合っているなかで、地区によって若干異なる部分があるものの､類似する物語などが多く登場することに気がつきました。そのような小国町で言い伝えられている物語に着目し研究テーマとして設定して探っていきたいと考えました。

２．調査の概要

（１）昔話収集

①アンケートの実施

②地区のものしり名人を探す

（２）聞き取り取材

①各地区の昔話をまとめる

②大里峠の大蛇伝説

（３）現地調査

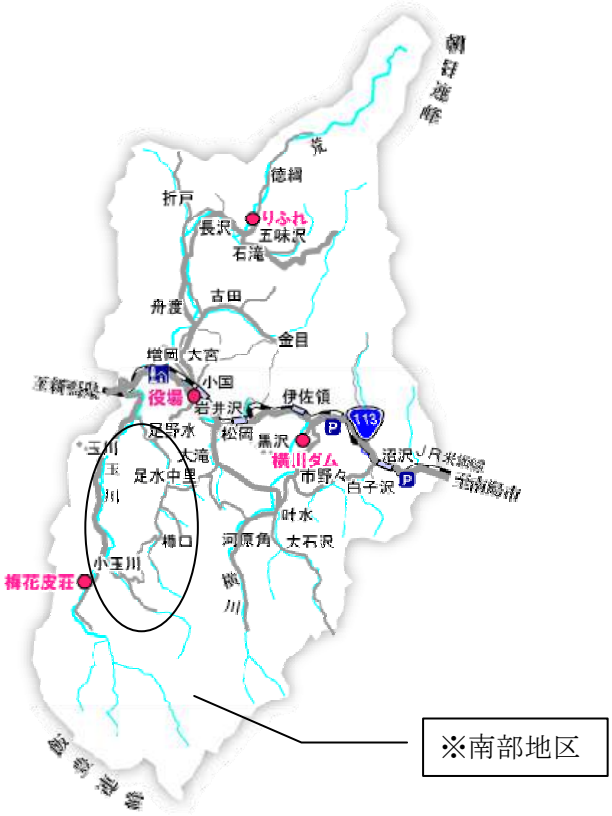
①関連深いもの

②現地を歩く

（４）紙芝居制作

①紙芝居を作る

②紙芝居を演じる



小国町地図（小国町役場ＨＰより）

３．調査の結果

（１）昔話収集

① アンケートの実施

地区を対象に配布し集計したところ「○○で幽霊が出る」というような幽霊に関するものが目立ったものの、肝心な昔話に関しては、祖父母が亡くなったり、祖父母と離れ核家族が多くなった等の理由で、特に有力な情報は得られませんでした。

② 地区のものしり名人を探す

小国町在住で山麓民話の語り部をされている方の本【長者原媼夜話（ちょうじゃはらのばばさのむかし)】を手がかりにその著者である佐藤とよい氏にお話を伺おうとしたのですが、すでに亡くなられていました、近隣の方にお聞きしたところ、詳しくはないにしろ地区の人が覚えているかもしれないという情報から調査地区を小国町の南部地区※に限定し、聞き書きを行い、調査を進めることにしました。

町役場や町教育委員会から地区のものしり名人を紹介して頂きましたが、高齢で話しが負担になるという理由で数人に断られるものの、ようやく了承をしていただける方と出合うことができました。

（２）聞き取り取材

①各地区の昔話をまとめる。

- 後藤弘子さん（小国町の語り部さん）
- 小島カツさん（足野水地区）
- 島貫一雄さん（市野沢地区）にお話をお聞きしました。

玉川太郎と慶次之助
昔、津川村（現在小国町大滝の丸山）というところに、背は小さいが、とても足の速い慶次之助という若者がおりました。もう一人、玉川に住んでいる玉川太郎という、とても気が短い若者がいました。この２人は、互いに強いばっかりにいつもけんかばかりしていて、仲が良くありませんでした。 ある日、二人はばったり出会いました。いつも口が早くて、けんかの種を作るのは玉川太郎のほうでした。「やい、慶次之助、お前はなんと小粒なんだろう。そんな身体でよく豪傑だなんていわれるな。」怒った慶次之助は、「なんだと！お前はバカにでっかいのぅ！しかし身体ばかり大きくてなんにも役に立たないのう。」こんな事から、またまたいつものとおり、けんかが始まりました。 そして、二人が数時間問答をしているうちに、とうとう取っ組み合いのけんかを始めました。たちまち二人は着物を脱ぎ丸裸で勝負を争いましたが、どちらも無双の豪傑なので容易に勝負はつきませんでした。気の短い玉川太郎は「えい面倒くさい、どちらが強いか見せてやるわい」といってそばにあった大きな石を目よりも高く差し上げ慶次之助に投げつけようと相手めがけて投げました。 慶次之助は「なんだ、こんな石」とひょいと受けてそれを受けるな否や「それ、お返しだ」と小さな体で投げ返しました。玉川太郎はぶんぶん怒ってまた「これでも喰らえ」とふた抱えばかりもある大石を慶次之助めがけて投げつけました。慶次之助は「なんだこんな石」とひょいと受けたが、あまりの大きな石に少しよろめきました。 それでも「それお返しだ」と玉川太郎に投げ返しました。生まれつき、怒りっぽい玉川太郎はカンカンに怒って今度は３抱えばかりの大石を「うん！」と高く差し上げました。それを見た慶次之助は「これはたまらん」と逃げ出しました。「こら慶次之助。逃げるとは卑怯だぞ、まて」と玉川太郎は大石をかかえて後を追いかけました。 でも足の早い慶次之助にはとても追いつくことはできませんでした。そうしているうちに二人の間隔は数町離れてしまいました。火の玉の様に怒った玉川太郎は、遥か遠くから大石を力一杯投げつけました。大石は唸りをたてて飛んで、逃げる慶次之助のすぐ後ろで「ドシン」と落ちて地にめり込んでしまいました。 今も滝集落の入口にある１寸５尺程の石が、玉川太郎の投げた石だと言われています。そして慶次之助は丸山の麓にある奥行が百間あろうかという岩穴の中に隠れたので命は助かりましたが、それ以来慶次之助は玉川太郎を恐れてその岩穴から一生出なかったと言われています。その岩穴を「慶次の穴」と呼んでおり、その前には慶次之助を奉った神社が今も残っています。 そして滝集落の丸山の付近には。藤と萩が１本も生えないのは、このけんかの際に慶次之助が穴へ逃げ込むとき、あまりに慌てて走ったので山の中の藤という藤、萩という萩に足をひっかけて全部根こそぎにしてしまったということです。それ以来、丸山には藤も萩も生えないと言われています。

高鼻峠の大蛇の話し（蛇）

小国町から杉沢へ行く街道に高鼻峠があって、その南口に小阿弥陀という所があります。昔、この田畑一帯を「丸屋」の家号で耕作していました。ある年の春、田んぼで働いている若衆のところへ、女中が昼食を届けに行こうと高鼻峠のヨシ沼のそばを通りかかると、若くとても素敵な美男子な男がいて、「ここで遊んでいかないか」と引き止めました。

女中は急ぐからと言って断ったけれども男は、ちょっとでいいからと言って聞きませんでした。仕方なしに帰りに遊んで行くからと言って逃げようとすると男は「約束の印として何か置いていけ」と言うのでした。女中は別に何とも思わないので自分の被っていた豆絞りの手拭いを渡し、すっかり道草をくってしまったと大急ぎで小阿弥陀へ向いました。

弁当を届けた女中は、さっきの約束事をすっかり忘れて沼の側を通ろうとした時、やぶの中に大きな蛇が、さっき自分の渡した豆絞りの手拭いを頭にのせ、とぐろを巻いてぐうぐう眠っているのを見つけました。すっかり驚いた女中は、小阿弥陀まで一目散で逃げ帰り、若衆に今までのいきさつを話しました。それを聞いた若衆は、手に手に鍬や鎌を持って沼にかけつけ、大蛇を退治してしまいました。若衆は、一番近くにある経塚山に大蛇を埋めることに決めたものの、あまりに大きくて運ぶ事が出来ないので、７つに切って背負い上り埋めたと云われています。

現在も経塚山には、その大蛇を祭った社があります。高鼻峠のヨシ沼の主は、夫婦蛇であったが男蛇が殺された後、女蛇は百子沢のある沼の主の許婚（いいなずけ）に嫁いだという。雨のしとしとと降る夜、蛇の目傘をさして行く大蛇の嫁入り姿を杉沢の人々は見て、その翌朝大蛇の通った道の草が倒れていたと言われています。

五色の大蛇の話し（蛇）

昔、町原の金昆羅山に八木九郎右ヱ門という豪族が住んでいた。又、松岡の字金右ェ門沢の山には九郎右ヱ門の甥にあたる畠金右ヱ門という者が住んでいて、長く勢力を争っていた。

ある年の春、畠家の住んでいた山が、七日七晩山鳴りがして地割れをおこし、崖が崩れた。その時山の上にあった畠家の大きな石の祠堂の屋敷鎮守がくずれ落ち、麓に出来た深い地割れの中へすっぽりと入ってしまった。するとその中から五色に輝いた美しい大蛇が現れて、近くの三光田沢へ登って行った。此の沢の奥には、松田の鎮守、福一満虚空蔵菩薩が鎮守しているのでその威光に恐れたのか、大蛇は沢の途中から引き返して、隣りの狢沢に入った。

当時このあたりは深い林で、沢水の量も豊であった。大蛇はこの沢の奥の黒岩滝の下まで登ったが、行く手が高い岩にさえぎられているので、しばらく落ち込む滝水と岩の間に身を隠していた。そこへ、松岡の谷四郎というものが通りかかり、滝壺が異様に輝いているので、不思議に思って中を覗くと、五色の大蛇が居るのを見つけた。驚いて松岡に下り、大勢の村人を連れて再び来てみると、大蛇は死んで滝壺にさらされていた。大蛇は人に姿を見られたので昇天の術を失い、天に昇って竜になることができなくなったから死んだのであると言われています。村人は、大蛇の死骸を滝壺からわずか下った沢のほとりに葬った。

この事があってから、谷四郎は発狂してしまい黒沢の沢の中で死んだ。今もその沢を谷四郎と呼ばれ、死んだ後もこの一家には不幸な事ばかり続いたので、大蛇を葬った場所に碑を建て水神様とし祭った。今でも大蛇が死んだ５月５日には、五色の梵天と赤飯を供えてお祭りをする。五色の大蛇が出てから畠家の勢は衰え、金右ヱ門は八木家の手下に殺されてしまったそうです。

伊佐領の熊の話し（熊）

伊佐領字箱の口集落の南東にある丘に「山の神」神社が祭られています。その近くに、高橋家によって祭られた「熊の神」という石碑があります。これは、その熊の神に伝わる物事です。

昔、箱の口の高橋家の一人が猟人をしていました。このころ熊射ちをする時には、何日も山奥にとどまり熊のいそうな所を、回って歩かなければなりませんでした。ある時、この猟人が集落から相当離れた山奥へ一人で熊射ちに出かけました。猟人が山に来てから三日にもなるのに熊はおろか足跡さえも見つかりません。三日目の日も何の獲物もとれないうちに、その日も暮れようとしていました。「ああ今日もだめか、それでは今夜泊る場所でも捜して、寝ることにするか、くたびれたわい。」と猟人は一人ごとを言いながら、その場に「どっこい」と腰をおろしました。とその時です。突然、カサカサと何かの歩くような、走るような物音を耳にしました。経験から猟人は、とっさに「獲物だ」を悟り反射的に置いてあった鉄砲に手をかけました。猟人は、目をキラキラ光らせながら鉄砲を持って身がまえ、その音のする方向にじっと目をすえていると、何とそれは、今までに見たことのない立派な大熊が目の前の尾根をゆっくりと登っているのではありませんか。猟人は、「これはしめた」とばかり引き金を引こうとした時もことです。自分は鉄砲で狙われていることを感じた大熊は、別に慌てた素振りも見せず、じっと猟人の方を睨みつけました。さすがの猟人も、その目の鋭さには、全身がブルブルと震えだしました。猟人は「何くそ、こん畜生」とじっと睨みかえしました。

その時この大熊は、どうしたことか猟人に見てくれと言わんばかりに両手を挙げてその場に二本足で立ったのです。それを見た猟人は「おっ」と驚きの声をあげてしまいました。それもそのはず、その熊はつま白だったのです。つま白という熊は両手の手の平の部分が真白になっており、当時の人々や猟人仲間では、山の神の使いとして撃つことを固く禁じられていたからです。そしてこの熊は人間には決して危害を加えないと信じられていました。

これを見てしまった猟人はどうしようかと迷ってしまいました。連日の不猟で、いらだっていた猟人に良心が「せっかくの獲物だが、つま白では殺せない。次の獲物を待とう。」と言いました。すると心の中の悪魔が「何言っているんだ。こんな見事な熊を見逃してしまったら二度とチャンスはこないだろう。だから思い切って撃ってしまえ。」と囁きかけるのでした。

良心・悪魔は猟人の頭の中でぐるぐる回るのでした。このような場合、人間はともすると悪魔のいいなりになりそうなものですが、この猟人もその一人でした。「そうだ、今ここでこのつま白を撃ったところで、どうせこんな山奥だ。誰も見ているはずがない。殺してからその場でつま白の部分の皮をはぎ取れば、誰も気がつくまい。」と、とうとう悪魔の誘惑に負け、撃つ決心をしました。鉄砲の引き金に力を入れると「ダーン」と暮れかかった山々にこだまして猟人の撃った弾丸は、見事熊に命中しました。その時撃たれた熊は、一瞬猟人を睨みつけたかと思うと「ウオー」と一声あげるやいなや下の谷川に転がり落ちていきました。

猟人は体をのり出して谷川の滝つぼに落ちた熊を見届けると「これはしめた」と高鳴る胸を押さえながら谷川へ走るようにして下っていきました。

息を切らんばかりにしてたどり着いてみると何と不思議な事に、そこには熊の姿はもちろん熊の落ちた形跡一つありませんでした。ただ澄み切った水が何事もなかったかのように流れているばかりでした。

猟人は半分恐ろしくなって「こんなバカなことがあってたまるものか。この目でしかと見届け

たのだ。」と自分の目を疑うようにして、辺りを何回も見回しました。しかし幾度見ようとも、熊の姿は見当たりませんでした。

その時猟人はある物を見てハッとしました。それはさっき落ちたはずの滝つぼの美しい水の中に、つま白の熊と非常によく似た小さな石が一つコロンと転がっていたからです。恐る恐る近寄って、その石を手にした猟人は、見る見る中に顔の色を失ってしまいました。見れば見るほどその石は、自分が撃ったはずの熊に見えてくるのです。

猟人はヘナヘナとその場にしゃがみ込み「ああ、俺は何てことをしてしまったのだろう。撃っては悪い熊を殺したので、神様がこの石を熊の身代わりにしたに違いない。後できっと祟りがあるだろう。ああ俺はどうすればいいんだ。」と何かにすがりたい気持いっぱいつぶやくのでした。

しばらくしてこうなったら、いさぎよく神様に謝ろうと自分に言い聞かせ「山の神様、山の神様、どうぞ愚かな私をお許し下さい。私は本当に悪いことをしてしまいました。自分の良心に勝てなかった男です。せめてもの罪滅ぼしに、この石の熊を一生大事に奉ります。そして以後、猟人をやめ熊の肉は一切食べないことを誓います。ですからどうぞ私をお許し下さい。」と何回も何回も同じこと繰り返して深く頭を垂れるのでした。

その翌日さっそく猟人は、その石を持ち帰り、現在の「山の神」神社の近くに埋めて熊の神として奉りました。この熊の神は、石碑が立てられており、高橋家では、今もって年に一度必ずお祭りをしているそうです。

それ以降、高橋家では集落で熊狩りがあってもそれには参加しないで、集落でとった熊も家の中では絶対食べないということです。代々そのように伝承されてきたからであり、いまだに高橋家にこの伝説が信じられているからです。

長者原の大蛇の話し（蛇）

（三角山）別名（雨乞い山）の麓にある長者原は、今でこそ人が住み米の実のなる田んぼが多くあるが、その昔は大きな大きな沼だったそうです。

その池は限りなく深く、青黒くよどんだ水の中からは時々白い角を持つ大蛇が頭をもたげ、里人からは「沼主」と恐れられていました。

その辺にはよし草が茂り、苔のむした大岩がゴロゴロ横たわり、誠に気味の悪い事はこの上なく誰一人として足を入れたことのない所でありました。

里人達が最もこの白い角を持つ大蛇を恐れるのは、秋の取り入れの時です。
里人がせっかく苦労して実らせた稲に、ごろりと横のなって昼寝をしたり又、昼寝から目をさましては人家に頭をつっこんで家ごと持ち上げたりして遊んでいたのです。

遊び疲れて腹をすかすと、こんどは手当たり次第に赤ん坊や子供を飲み込んでしまい、とにかく里人達はおちおち仕事をしている事ができませんでした。

ある時どこから来たかわからないが、（小玉川）へ行くという旅人が一人道に迷ってこの沼のあたりを歩いていました。するとこの沼の主、白い角を持つ大蛇が十重二十重にとぐろを巻いて昼寝をしているのにぶつかりました。

すっかり驚いて逃げようとすると旅人を丁度目を覚した大蛇が、昼寝後の腹ごしらえとばかり猛然と襲いかかりました。

肝をつぶして驚いた旅人はもうだめだと思い、日頃信ずる飯豊権現様にせめてもの御祈りをしようと手を合わせて目を閉じました。

すると不思議なことに大蛇は襲いかかるのをピッタリとやめ「オレは生まれながらにしてタバコのヤニが嫌いなのだ。お前を助けてやるからこのことは誰にも話すなよ。もし話せば命はないぞ。」と言いそのまま沼の中へゴボゴボと入ってしまいました。危い身をのがれたのも飯豊の権現様のおかげと後に１週間山に籠り、社の土台を直してやったそうです。

旅人は道々を考えて、

「こんな恐ろしい大蛇が住んでいる限り世の中の人々は幸せに暮せない。」と思い、今大蛇に聞いた一番嫌いな物というタバコのヤニのことを小玉川の村の衆に語って聞かせました。

小玉川にはそのずっと昔から腕ききの狩人が十１３人も住んでいて、

「何とかして大蛇を仕とめたい。しかしただ弓を射て、まともに向かっただけでは敗けてしまう。何かいい方法はないものか。」

と手ぐすねひいていた。旅人からその話を聞くと、「しめた」と思い、

「よし、ひとつオレ達がその白い角をもつ大蛇を退治してやろう。」ということに決まりました。

そこで１３人の狩り人達は、タバコのヤニを沢山背負い勇んで村を出発しました。沼の辺に着くと、さっそくたき火をして待つこと一昼夜、沼の水面は相も変わらず青黒くよどんでいました。

ついに、七日七晩交代で寝ずの番をし、今か今かと待っていました。そしてその７日目の晩に、突然ガボガボと水面を割って沫を上げ白い角をふりたてた大蛇のかま首がガッキと持ち上げられました。

それっとばかり１３人の狩り人は、タバコのヤニのベットリついた矢をつがえ、きりきりと弓を引きしぼり一勢にヒュツと放ちました。さすがに白い角をもつ大蛇でも、１３人のしかも一番嫌いなヤニのついた矢を射こまれたのではたまったものではなかったのです。

金目のにわとりの話し（鳥）

昔、金目集落は、天候に恵まれ、人々はたいへん一生懸命働いたので毎年豊作が続きました。

このような幸福な生活を長い間送っておりましたが、ある年のある日の事です。突然あたりが暗くなったかと思うと、ものすごい大雨が降り出しこれが何日も何日も続きました。この悪天候のために、その後虫やうじがわき出し、それが原因で悪病がはやり出しました。

人々は苦しみもがき、働くことが出来なくなったために農作物が全然取れなくなって、人々は、困り果てた末に家宝であるものを持ちよって神様にそれを奉納し幾度も拝みましたが何の効果もありませんでした。そしてその年はとうとう凶作で暮れてしまいました。

食べ物がないために、老人や子供達は、次から次と餓死するありさまでした。そうしたある日、目も開けていられないほど西の空が黄金に輝いたかと思うと、そこには一羽の美しい黄金のにわとりが現れました。村人達は、あれよあれよと空を見守っていました。

その美しいにわとりは、突然集落に舞い降りてきて、今まで非常に多くはびこっていた、うじや他の虫を食べ尽してしまったということです。

そのため村人の病気はすっかり回復し、人々は以前の幸福をとりもどしました。集落の人達は、これはまぎれもなく金色のにわとりのお陰であるとし、それから後に神として祭りました。

金色のにわとりが集落全体を救ったのだと信じられ、当時は金目ではにわとりの肉や卵を食べなかったと言われています。

しかし集落以外の他からもってきた卵は食べても良いと言われています。その時奉ったにわとりを描いた掛け軸が今でも当集落のどこかの家に家宝として残されていると言われています。

しめじの話し（山菜）
昔、小国の国蔵様を通る道（現在では松岡を通る道）をさらに奥に進むと山の麓に三軒の家がありました。その中の一軒の家には、とても親孝行の息子とその母親の二人が貧しいながらもたいへんつつましく暮しておりました。 ところがある日、突然その家の母親が、今までの苦労が重なり倒れてしまいました。息子は必死になつて母親の看病をしましたが、容体は良くなるどころか日増しに悪くなるばかりでした。 息子は心配で夜もろくに寝ないで、つきっきりであつかいました。そのため、家には食べ物らしいものは何もなくなってしまい、困り果てた息子は、近所に食べ物を少しでいいから分けてくれるよう何度も頼みましたが、親切に与えてくれる人は誰一人としてありませんでした. かねがね息子は、山の奥に行くと沢山の茸の出る場所があることを聞いていました。しかし、その場所は、村人達の噂によると大きな角のある白い大蛇が常に横になって寝ていてその場所に近づくと大蛇に食われてしまうと言われていました。 誰もが大蛇を恐れてその場へ近寄りませんでした。息子は、「このままの状態でいたら二人とも餓死してしまう。けれども、そこへ行けば大蛇に食べられてしまう。ああ、私はどうしたらいいのだろう。」と一人で迷っていました。 さんざん考えた末に、自分は何も食べなくとも、せめて病気の母親に食べさせないといつになっても病気は治らないと、息子はついに大蛇のいる場所に茸を採りに行くことを決心しました。翌日、まだうす暗いうちにこっそりと家を出ました。どこまで歩いてもその山は見当らず、半分あきらめに似た気持ちでとぼとぼと歩いていたが、腹の空いたのも手伝ってとうとう歩けなくなり、その場にしゃがみ込んでしまいました。日は遠慮なしに暮れようとし、その美しい夕日だけが息子を慰さめるかのようにいつまでも輝いていました。息子は母のことを気づかいながらもその美しく照り映えた夕日にじっと見とれていました。 しばらくして息子は、何の気なしに足元に目を落してびっくりしてしまいました。何とそこには、一面にじゅうたんを敷いたかのように、見事な茸がいっぱい生えているではありませんか。今までの疲れはどこへやら、息子は息をはずませながら一生懸命に採り続けました。 そのうちに手元が暗くなり気づいてみると日はとっぷりと暮れてしまい、家に帰る道さえわからなくなってしまいました。 息子は「こんなにたくさん採ったのに家に帰れなくなってしまった。お母さんは心配してるだろうなあ」といいながらどうしようもなく、そこに野宿する事に決めました。 くたくたに疲れて寝たものの母を心配するあまり夢を見ては幾度となく目を覚まし眠れないままに夜を明かしてしまいました。「さて今日はもう少し採ってから暗くならないうちに帰ろう」と思いながらまた上った時、驚きの声をあげてしまいました。 目の前に列を作って大きな立派な「しめじ」が自分の目を疑うほど沢山生えていたからです。息子は、今までの茸を捨てこの立派なしめじを採れるだけ採って大喜びで家に帰りました。 早速親にその茸を食べさせました。母親は涙を流して我が子に感謝し、病気もすっかり良くなって親子そろってささやかながらも、幸福に暮したと言われています。 村人の見た白い角のある大蛇とは、この立流な茸の群れだったのです。 神様はこの茸の群れを村人には大蛇に見えるようにして親孝行の息子には茸のある場所に導いてくれたのだと言われています。

石ませの話し（馬）

昔、山また山に囲まれた金目集落の夜の出来事。夜もふけ集落中が寝静まった頃、集落の一人の若者が、せっせと夜仕事をやっていました。仕事を終った若者は「どれ仕事もちょうどきりがついたから寝るとするか。」と一人ごとを言いながら、戸締りをしようと外に出た時です。若者は、なにげなく満月の光に照らされた集落の近くの山に目をやった時、突然その山の裾を、ボーと幻のように一頭の白馬があらわれました。「おや？何だろう、今頃の時刻にまさか、夢なのだろうか」。と不思議に思いながら幻のように現れた白馬をじっと見ていると、今度は、幻のようにボーと消えていくではありませんか。若者は驚きました。「これは、どうしたことだろう、白馬が現れたり消えたりして・・」と薄気味悪くなってきました。しかし、人間というものはこうなると、その正体を知りたがるものでこの若者は一層その事に興味が出てきてその附近をじっと見まわしていました。すると今度は、さきほど山のそでで幻のように消えた、あの白馬が山の項上にボーとまた幻の如く現われてきました。そして、じっと集落を見下ろしていました。さっきから見ていた若者は「これは何ちゅう事だろう、白馬が山の下に現われて消えたと思ったらこんどは山の頂上に現われて、そしてこっちを見てやがる」と一人ごとを言いながら見ているとボーと白馬は幻のように消えて見えなくなりました。若者は、今度はどこに現れるのかとあちらこちら見まわしたが、その晩は現われませんでした。

次の日若者は昨夜の不思議な出来事を、村の人々に話しましたが、村人達は「夜の夜中に白馬か現われて消えたと思ったら、山のてっぺんに現われるなどとんでもない。おまえは寝ぼけて夢でも見ていたんだろう、人を驚かすにもほどがある」と誰一人として信じてくれる者はありませんでした。だれにも信じてもらえなかった若者は、「そうだ、もしかしたらまた夜になると現われるかも知れない。」と次の晩から夜が更けてくると、じっと集落の近くの山々を見まわしつづけました。

次の日も次の日も、しかしついに白馬は現われませんでした。そして数日たって、また満月の夜、若者はじっと山を見ていると、最初の晩のようにボーと白馬が現われてきました。消えては現われ、現われては消えながら、じっと集落を見下ろしていました。若者はその白馬を見ながら「やつめ、満月の晩になったらまた現われたな。あいつの正体は一体なんだろう」とつぶやきながら見ていると、その馬は突然大声でいななきました。すると集落に突然不思議な事がおこりました。というのは今の一声で集落に飼ってある馬という馬が突然狂ったように動き出し、馬屋から飛び出す始末です。

そして狂ったように飛び跳ねながら、さきほど音のした方へドッと走って行くのです。若者は「こりゃどうしたことだ、集落中の馬ちゅう馬が、みな走っていくじゃねえか。」と驚いて見ていると、今度は、山の項上に幻のように現われた白馬が空を飛ぶように山を下ってくるのです。

さあ集落中はハチの巣をつついたような騒ぎです。「おらの家の馬が逃げたよう」「おらの家の馬だあ」「あっちへ行ったぞ」「そら、山の上からおりてくる白い馬に向って走って行くじゃねえかあ」と集落中の人達が外に出てきました。

小屋から逃げた馬どもは、山から降りてきた幻の白馬を先頭に狂ったように田畑かまわず集落中をかけ走りました。集落の人々が見ている中を一晩中走りまわり、夜明け近くになると、今まで先頭になって走っていた白馬がボーと消えていきました。

するとどうしたことか、今まで狂ったように走りまわっていた馬々は、何事もなかったような

顔をして自分の家に帰って来たのです。さて次の日集落の人々は大騒ぎです。夕べの白馬のおかげで田も畑もめちゃくちゃになってしまったのです。「ああ、せっかく実ったのに、相当だめになってしまった。」という声があちらこちらで聞かれました。それから後の満月の日も幻のような白馬は現われ集落の田畑を荒らしまわりました。集落の人々は、満月の度にこんなことが続いては、とんでもないことになってしまうとさっそくみんなで相談しました。その結果、いつもの馬が暴れて走りまわるところに石をならべて「ませ」を作ろうということに決まりました。次の日から早速その工事にかかり大きな石をならべて「石ませ」を作りました。

それ以後集落はこの幻の白馬からの害は免れ、再び平和がやってきました。そして、それ以後この石で「ませ」を作った場所を誰からともなく「石ませ」と呼ぶようになったと言われています。尚、現在もこの「石ませ」には大きな石がごろごろして、歩きにくくなっているそうです。

（市野沢・足野水の歴史より）

市野沢のかじかの話し（魚）

小国町市野沢地区に盛残川という川があります。

昔から、盛残川のかじか（川魚）は片目がつぶれている、と言い伝えられて来ました。なぜかじかの片目がつぶれたか、それにはさまざまな由来が語られています。

かつて、八幡太郎義家がこの地で戦ったことがありました。その時、戦い不利となった八幡太郎義家の軍はただひたすら逃げなければなりませんでした。当時この地方の山や野はあまりにひどい藪で、容易に逃げることができませんでした。そのため、義家の軍はこの盛残川に沿って逃げ上ったと言われています。この川に沢山住んでいた、かじかは、その際沢山の馬の脚に踏みつけられた為、とうとう片目を失ってしまったということです。

また、次のようなことも言われています。

やはり同じ時、八幡太郎義家の家来が川岸を歩いていて、１匹の大きなかじかを見つけました。彼はそのかじかに非常な興味を感じ、おもしろ半分にやりの石づきでかじかを刺しました。石づきはかじかの片方の目をついてしまいした。ところがこのかじかは、かじか仲間の大将（パパカジカ又はオバカジカというそうです。）だったのです。家来のかじか達は大将かじかが、片目になっのを大そう悲しみました。そして家来のかじか達は残らずこの大将に従って片目を落としてしまったのでした。今でも片目のない、かじかがいるのはこのためだということです。

また、このかじかについて別の言い伝えがあります。昔、源頼朝に追われた源義経が奥州に逃げて来た時でした。義経はこの盛残川を家来の弁慶と共に上ったのです。この時弁慶が手に持っていた、やりの石づきで面白がってかじかの片目をついたのだそうです。この川のかじかの片目がつぶれたのはこのためだとも言われています。

ネコまたの話し（猫）

「ねこまた」というところは、手の子と間瀬の間にあります。そこにはこんな話が伝わっています。昔、そのねこまたに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある晩、手の子で芝居があるというので、おじいさんは見に行きました。おばあさんは１人で留守番していましたが退屈になったので、かたわらにいたネコに「じっちゃ（爺さん）は今頃、なんぼ面白がっていたんだか、なあ、三毛。」すると、ネコがおばあさんに、「ばっちゃ（婆さん）、今、じっちゃ見ている芝居とおんなじことして見せっから、誰にもゆわねでくれよ。（言いなさんな）」
と念を押して、今おじいさんがみている芝居と全く同じことをして見せました。驚いたのはおば

あさんですが、誰にもいわないことをネコと固く約束しました。次の日、おじいさんが帰ってきて、その芝居の面白かったことを、おばあさんに教えようとしました。ネコとの約束を忘れたおばあさんはその芝居はこんな芝居だったのではなかったかと言ってネコに聞いた芝居の内容をうっかり言ってしまいました。おじいさんはびっくりして、おばあさんにどうしてその話を知っているか聞きました。ねことの約束を破った事に気がついたおばあさんは初めのうちはしゃべりませんでしたが、おじいさんに問いつめられ、ぽつりぽつりと話し出し全部しゃべってしまいました。その時ネコは、天井で目を光らせこれを聞いていていました。そして大雨の降るその晩、おばあさんは、ネコにかみ殺されてしまいました。おばあさんの葬式の時も、大嵐でした。

ネコは、大きな化けネコになっておばあさんの入っている、棺おけをさらっていってしまいました。それ以来、落合いのネコまたの葬式の時は、いつも雨が降るということです。

サルが城のサルの話し（猿）

飯豊山麓、長者原の「サルが城」には、その名の通り何千匹ものサルが群れが遊んでいた頃がありました。

ある日、村の子ども達が、大勢で川原に行き、「誰か１人地蔵様になんぜ。（地蔵様ごっこ）」と言って遊んでいました。

そうしているうちに、地蔵様になって立ち続けている子供の事を、そのまますっかり忘れてしまいみんな家に帰って行きました。

まもなく「サルが城」に住むサルが大勢つれだって遊びにやって来ました。そして、「おや、ここに地蔵様がいる。」とさっきから立ち続けていた子どもを見つけて言いました。サル達は、ずっと前から、自分達も人間の様に地蔵様がほしいと思っていたので、さっそく藤づるでかごを作り、それに乗せて連れて行きました。

川をかついで帰る時、「サルの尻ぬれても地蔵様ぬれんな（濡らすな）。つんつくつん。つんつくつん。」面白いふしをつけて何回も歌いながら行きました。

サルが城に着いたら、サル達は小屋をかけ、地蔵様になった子供を置き、山からいろいろな珍しい果物を取ってきて、それでサル料理を作って与えました。「地蔵様よ。また川遊びに行ってくるから、るす番しててくれよ」といってサル達は再び川に行ってしまいました。

みんな出かけた後、地蔵様になった子どもは、目の前に与えられたサル料理をすっかり背負って家に逃げ帰りました。「おれ、サルが城さ行って、地蔵様の真似しったら、こんなにいっぱいサル料理もらって来た。」といって、近所の子どもたちみんなに見せました。そうしたら、「おれがこんど地蔵様になる。」と欲の深い子どもの１人が言い、地蔵様になりきっていると、やっぱり山からサル達が大勢連れだってやって来ました。「あらあら、おら家の地蔵様、水あそびに来った。早く連れて行け」と言いサルが城に連れて行きました。

川を渡る時、「サルの尻ぬれても地蔵様ぬれんな（濡らすな）。つんつくつん。つんつくつん。」と、面白いふしをつけて歌いながら行きました。それを聞いた欲の深い子どもは、自分が地蔵様の真似をしているのをすっかり忘れてしまって、くすくすと笑ってしまったのでした。サル達はこれを見て、「こんなもの、生き地蔵の、にせ地蔵だ。」と、バリバリひっかいて、川の中にドブンと投げてしまいました。

サル達は、こんな事をして毎日遊び暮したものだそうです。

サルが城の中腹には、その昔サルの頭が住んでいたという大きな岩穴が今もあるそうです。

百子沢の大蛇の話し（蛇）

「百子沢」という地区には、その頃、家が百戸あったと言われています。今でこそ百子沢と書きますがその昔は「百戸沢」と書いたそうです。そこに、たいそう意地の悪い、今で言えば、ガメツイ庄屋の旦那様がいました。その旦那様が、ある時、越後に用足しに行った帰り道、「金丸」という所まで歩いていきますと若くて綺麗な一人の娘に出合いました。

「どごさえぐ？（どこに行くの？）」と開くと「どごさえぐにもあてのない身だ。おれの父親も母親も死んでしまって、今では身寄り１人いなくなってしまった。何とかして下さい。」と答えました。「ほんなら、おらの家さ来て、下女になって稼げ。」と旦那様はその若くて綺麗な娘をつれて帰りました。お花という名前で呼ばれるその娘は、たいそうの働き者でもう村中の評判になりました。

ところが、ケチな旦那様は身よりのないお花を救ったという恩をきせて、１文の給料もやろうとはしませんでした。むしろ、村の人々の評判を気にして、お花を憎むようにさえなったのです。

ある日、旦那様の庄屋に殿様から使わされた役人の客がやって来ました。その時、家宝にしていた南京焼きの１０杖１組の皿を出し、お花に盛りつけをさせ、役人を接待したのです。夕方家宝の皿をしまう時、だんな様は１０枚のうち１枚をそっと隠してしまいました。お花が、いくら教えても９杖しかないことを旦那様に告げると、主人はもうかんかんに怒って、それから毎日、お花を今まで以上にこき使うようになりました。

皿を洗う時、その１枚を池に流してしまったものと思っている正直なお花は、旦那様のひどい仕打ちにも口答え１つしないでつとめました。しかしあまりの辛さ、悲しさに、お花は、とうとう皿を洗った他の中へ身を投げてしまったのでした。旦那様は、池の前に２つ並ぶお花の草履を見つけ、ずいぶん驚き、慌てましたが、今さらどうすることもできません。村中の若者を頼んでお花の亡がらを探しましたが、そんなに大きい池でもないのに、不思議と見つかりませんでした。その後、毎日夕方になると、「ひとつ、ふたつ、みっつ・・ここのつ、とおの皿がない。」
というお花の皿を数える、もの悲しげな声が聞えるようになったのです。その声を聞く者の胸は、まるで切なくかきむしられる程だったと言います。そして、１週間それが続いた時、他の水がざわざわと騒ぎ、がばっがばっと池の淵が欠けていくようになりました。２日も経つと、旦那様の家は、他の中にぐらりと傾き、ついにめりめりっという音と共に全部沈み去ってしまったのでした。それからも、夕方になる度にお花の皿を数えるうらめしい声が村中にひびき渡り、池は相変らず、がばっがばっと欠け続けたといいます。百軒あった村はその全部が池の中に沈み、大きな大きな沼となった池には時々、直径５０センチ程の丸太のような蛇の遊ぶ姿がみられるようになりました。その後、その大蛇は自分の棲家をいつか機会があったら海に移そうと考え始めました。

宝暦七年（１７５７年）５月２７日、３メートルを越える大洪水が起り多くの人々を混乱させたことがありました。「足水川」のほとりもその例にもれず、あたりの田畑がすっかり水びたしになってしまいました。その時、足野水の三次というじいさんが、水の心配をして、家の前にたたずんでいると、足水川の上流から、大きな丸太が１本流れて来るのを見つけました。あれあれと思っている間に目の前に来て、突然ぐにゃりとくねったかと思うと、がばっと大蛇のかま首が持ち上げられ、そのまますうっと下流に去ったということです。その後、百子沢の沼は自然に埋まっていき、今では、家も相当に立ち並ぶ集落となったそうです。しかし「大沼」と呼ばれる沼だけは今でも残っています。

この話しは（金儀右ヱ門氏）の書いた「小国歴史伝説集」によると（百子沢の大沼）と題して次のように書かれています。

百子沢の大蛇の話し（蛇）小国歴史伝説集より
昔（南小国村百子沢）の成金持の家に、お花という女中がいた。お花はいくらきれいに髪を結って寝ても、夜中になると一人で髪がほぐれ、そばの障子ほどにサラサラと這い上る不思議な病気があった。 ある時、お花は、家の宝である南京焼きの１０枚そろいの皿を洗っていると、あやまって１枚割ってしまった。お花は、主人の厳しい叱りを受けるのを嫌って流し尻の池に身を投じて死んだ。 ところがその夜、池のほとりから、ガラガラと土が崩れて、家も屋敷も一夜の内に大きな沼に化してしまった。これが（大沼）である。

こんな別説もお聞きしました。

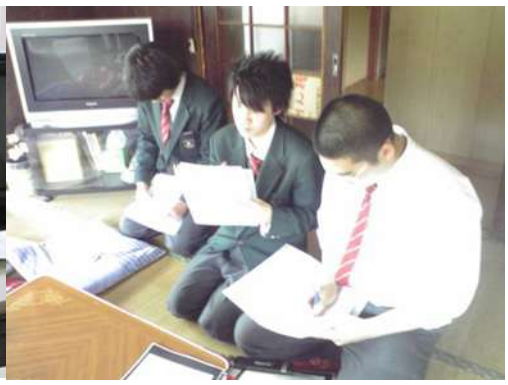
お花は大変美しい女中であったので、主人が惚れ込んでしまい、いろいろな手をつくして、お花を我がものにしようとしたが。何としてもきかないので、ある時、お花に家宝の南京焼きの皿を洗わせ、その中の１枚を主人が隠して、そしてお花に「お前が盗んだに相違ないから、皿を返せ、それができなかったら俺の妻になる事だ。」と責め立てた。いくら責められても、お花にはそんな皿を返せるはずはなく、又主人に身をまかせることは死ぬよりも嫌だったので池に身を投じてしまった。すると、お花は蛇体になり、家屋敷を沼にしてしまった。

百子沢は非常に沼が多い場所で、昔は４８の沼があったと言われています。中でも一番大きいのが大沼であったようです。

まとめ

地元の方の協力を得て様々なお話しを各地区の方からお聞きすることが出来ました。その中で、小国町在住で置賜地区を中心に語りべをされている後藤弘子さんには、実際に【語り】を披露して頂き、昔の生活風景を想像できる楽しい話や蛇に関するおどろおどろしい話など、お聞きしました。内容もさることながら、つい引き込まれる巧みな話術に驚きました。登場人物やナレーションも一人で声をかえるなどして話します。不思議なことに紙芝居のように絵がなくても背景が想像できました。紙芝居とはちがい背景は個々の想像に任せるので自分の思い出の場所や印象的な場所などが登場し構成される分、印象に残りやすいのではないかと思いました。

また、動物、特に蛇に関しての話が多数あったことが印象的でした。その中でも大里峠の大蛇の伝説は多少の違いはありましたが、皆さんがご存知でした。



②大里峠の大蛇伝説

ｉ．大蛇伝説に関して詳しくお話を伺う

山形県側からの大里峠登り口である玉川地区にお住まいの渡部競さんにお話を伺う。

大里峠の大蛇（小国側の言い伝え）
昔、越後女川村の今の蛇喰（じゃばみ）に忠蔵という猟人がおった。忠蔵は奥山の阿古屋谷という所で、木天蓼（またたび）を燻し、その香りを慕ってくる大蛇を鉄砲で撃ち獲って生計をたてていた。大蛇の肉は三年以上漬れば立派な食料になるのであった。 ある日、忠蔵の妻のお里乃が家人の留守に夫の戒めを犯して、大蛇の塩漬の味を見ようと三年経たないうちに桶から少し出して食べてみた。するととても美味しくてやめられず、遂に桶一桶食べ尽してしまった。そのうちにひどく喉が渇いてきたので、流しに行きひしゃくで、水を飲んだがいくら飲んでも飲み足りないので、外に出て堀の流れに口をつけて水が涸れる程飲んだ。それでもまだまだ渇きがとまらないので、ついにお里乃は大川に這入って息もつかずに水を飲み始めた。それを見つけた村人は、お里乃が気が狂ったというので大騒ぎになった。 そのうち空が俄かに雲ってきて、大雨風が起り、黒雲が舞下がってお里乃の体を包んだかと思ったと思うと、お里乃は蛇体になって雲に乗り、天上遥かに飛び去って行った。忠蔵はその後人々に暇を乞い、髪を剃って巡礼となって旅に出た。お里乃は関谷と小国との境の大里峠に棲みついた。それからは、時々人里に出て農作物を荒したり家畜を取ったりした。又、山に働いている樵夫や、峠を越える者等が大蛇に毒気を吹きかけられて体が煙のように消えてしまった等というので、近郷の物は誰一人として恐れない者はいなかった。 こうなっては神様に頼る外ないと、関谷の者は老人も若人も鎮守の前に集って、七日七夜の祈願を行った。満月の夜のことである。小国の方から大里峠を越える一人の盲の法師があった。この法師は柏崎の生まれで、蔵の市という者であった。山路で疲れたので、頂の辺りまで来て岩に腰を下して休んでいたが、何時の間にか眠ってしまった。目を覚した時はもう真夜中の頃であった。法師は余り淋しくなったので背負って来た琵琶を取り出して弾き始めた。その美しい音色は静かな山に響きわたった。しばらく弾いていると、法師の前にうら若い声がした。「なんと美しい琵琶の音でしょう。私はさっきから聞き入っていました。」意外なことに法師は驚いて、その女を、「何者であるか。」と尋ねると、「私はこの山に住んでいる大蛇です。普通は岩穴に隠れていますが、身を現せば幾つもの峰を巻き、谷という谷を埋め尽してしまいます。今はこの山も狭くなったので近いうちに荒川を堰止め関谷郷は勿論小国郷までも泥の湖にして住もうと思っています。あなたがもしこの里の人でしたら早く里の外に移りなさい。私は何より好きな琵琶を聞かせてもらったので御礼に教えてあげたのですが、このことは里人に行って決して話してはなりません。若し言うことにそむくようなことがあったらあなたの命はないでしょう。」と言った。その時法師は又訪ねた。「あなたは今何よりも琵琶が好きだといいましたが一番嫌いなものは何ですか。」「鉄が一番嫌いです。蛇の身に鉄ほど毒なものはありません。」と言って女はどこへともなく去ってしまった。法師は、我が身一つより多くの里人を助けなければならないと、山を下って村長に昨日のことを語り、大蛇退治の方法まで教え又鎮守の前で姿を消してしまった。その後には、携えていた琵琶と杖だけが残されていた。そこで村長は四里四方に御布令を出して、鍋釜といわず鉄気のものは何でも残らず持参させ、俄に鍛冶屋を建てて鉄の杭を沢山作らせた。それを村の屈強な者にそれを持たせて大里峠に登り、山中にそれを打込んだ。大蛇は一番の毒である鉄の杭を刺されたので、地を震わし、山を鳴らして苦しみ出し、七日七夜苦しみ続けたが。つ

いに息を絶えてその振動が静まった。再び山に登って見ると、大蛇の死骸は大里峠の山を７回半まいていたという。人々は山に火をつけてその死骸を焼いた。大内淵は尾打淵から変化したものであり、大蛇が死ぬ時に苦しんで尾を打振ったために、掘られて淵になったものだという。里人はこの災害から救われたのも偏にあの法師のおかげによるものと感謝し、琵琶と杖を法師の御しるしとして関谷村も鎮守に合祀し、蔵の市の字を取って大蔵神社と称した。殺された大蛇はその後しばしば大里峠を通る者に祟り、突然大嵐を起こしたり、山鳴りをさせたりするので、峠の上に石碑を建てて大里大明神社として祀りその霊を慰めた。大里峠を掘ると今でも蛇骨が出るそうであり、それは傷薬になると言われている。

一方関川側の言い伝えはこのようなものでした。

大里峠の大蛇（関川側の言い伝え）

女川村の蛇喰村（じゃばみ）にお里という女が居りました。子どもはなく、夫は猟師をして生活をつないでいた。ある日夫は大蛇を撃ちとってその肉を甕（かめ）に味噌漬けにし、当分の間この中を見てもいけないし、食べてもいけないとお里に注意し地中深く埋めてしまいました。３年経てば立派な食べ物になるからです。ところがお里はその中身が何であるか夫から知らされてはいませんでした。見るな、食べるなと言はれれば見たくなるのが人情です。夫の留守に、あれほどかたく注意されたにもかかわらず、見たさについ地中から掘り起し中をしらべると肉の味噌漬だった。香りもよいので一切焼いて食べてみた。ところが、今迄食べたことがなかったほどのすばらしい肉の味だったのです。気づいてみるとかめの半分くらいもなくなっていました。だがのどがかわきしようがありません。小堀に口をつっこみ飲みましたが、これで沢山にはなりませんでした。すぐ近くの荒川に行きがぶがぶのみました。ふと我にかえり水面にうつった自分の姿を見て驚いてしまいました。自分が蛇に変わっていたのです。お里は家に帰ることができなくなり、大蛇となって、今の蛇くずれを上り大里峠付近の山に横たわりました。７つの山をかこむ位の大きな長い体になってしまいました。今の大里峠に住みついたわけです。ある夜、盲の法師が小国の方から大里峠を越えようとのぼってきました。頂上付近の木の側（木の穴のあいた所）に腰をかけ一休みしました。さびしまぎれにシャミをひきはじめました。真夜中になって、きれいな声の女が近づいて話しかけました。「あまりシャミが上手なので聞きに参りました」と、法師といろいろな話しをし、いつか自分の身の上話をしていました。最後に他言はならぬとかたくいいわたし、もし他言したら貴方の命はないばかりか、この辺一帯を水の海にしてしまうと言って立去りました。やがて法師は下関の渡辺三ヱ門方に立寄り、その話しをつたえました。そこで大蛇退治をする相談になり、かじ屋敷で鉄棒をつくり、これを山に打ち込み大里の大蛇を退治しました。法師も死んでしまいました。法師のシャミと杖は大蔵神社に本尊様となりまつられている。付近では蛇骨（蛇石）と呼ばれるが石膏石が採取できるそうです。蛇石はあかぎれの薬になるといわれています。米沢方面の人々には効きが良く、関谷方面の人々には大蛇を殺した祟りで効用がないと言われています。

また次のような説もありました。

蛇喰（じゃばみ）に忠蔵と言う炭焼きが住んでいた。忠蔵は阿古屋谷にいた大蛇を斧で殺し、持ち帰り”みそ漬け”にしてしまう。翌日、忠蔵が出かけたあと女房の”おりの”がこれを見つけ、それを全部食べてしまった。猛烈にのどが渇いた”おりの”は大量の水を飲み、自らも大蛇になって女川を上っていった、おりのが大蛇になったことを知った村人は、夫の忠蔵と娘の波（なみ）を捕らえ、荒縄で縛って女川に投げ込み、殺してしまったという。

琵琶法師”蔵の市”の碑

蛇喰村にある、おりのの碑

蛇骨（繊維石膏石）

以上の言い伝えには所々相違点が見られます。特に気になったのは、蛇を塩漬けにした部分です。関川村（新潟県側）では味噌漬けとなっています。調べていくうちに本町地区にこんな話があることがわかりました。　（小国郷・本町地区の伝説集）より

小国の村夫
草刈りに行った小国の村夫は、あっちの山こっちの山と歩き回って、ふと一本の細道を歩いていくと道の真中に松の木のようなものがあったので、近寄ってみると、毒蛇で背には黒い銅銭の模様は確認出たが、頭と尻尾は、藪の中なので長さは分からなかった。３～４尺の木を鎌で切って「えい、この憎い奴」と力一杯に叩くと藪の中から頭をもたげ、その頭は祭獅子ほどあった。両耳が高く突き出て、目には金がたたえてあるようで、口からは盛んに毒気を吐き出していた。彼はいまこそと頭を力一杯叩いてやろうとしたが、その頭を見てすっかり気が抜け、どうせ蛇のほうが早いに決まっている。こうなれば、と棒を持ち直して打ってかかり、ぐったりとしたところを大石でとどめをさしたときに、越後から山師がやって来て、これを見て見世物にするといって塩漬けにして持っていった。

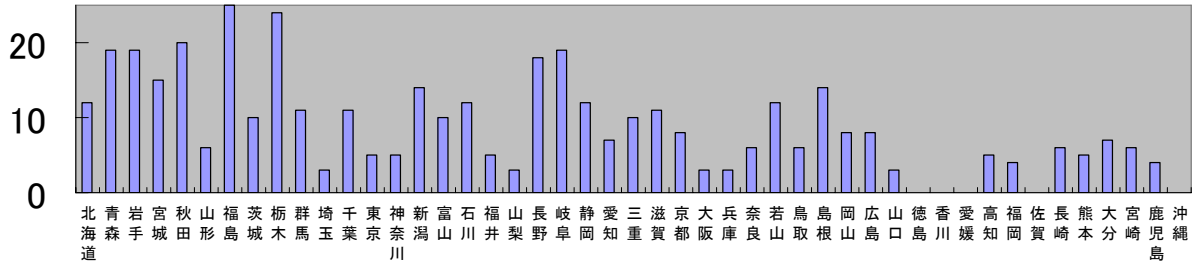
保存する場合、やはり塩漬けや味噌漬けを思い浮かびましたが、特に海岸を持つ羽越では塩が身近で、四方を山に囲まれた小国では豆から作る味噌が主流と思われたのですが、逆になっているのは疑問でした。詳しく聞いてみると小国でも味噌漬けと聞いている人もいて言い伝えそのものが不確かでした。当時は村の外に行く機会が少なく（特に大里峠は関所もある羽越国境でもあり容易に行けなかったこともあり）隣村の情報も乏しく、互いの隣村のこうだろうという思いを互いが話していたのではないかと考えたものの、もう少し詳しく調べる必要があると感じました。

左上　：渡部競さんにお聞きする
中央上：岩穴の内部
右上　：物語を話す渡辺競さん
下　　：玉川太郎が投げた石の前で

ⅱ．蛇と名の付く土地

蛇喰村（じゃばみ）という地名が登場しました。蛇はあまり好かれない動物なので名前としてはあまり使われないような感じをあり、全国でどの位あるものか調べ表にしました。

（地図で見る日本地名索引より）



地名は重複するものがいくつかあるものの全国で４１４箇所ありました。

結果は意外に多く、特に東北地方に多いことがわかりました。

では、なぜこのように東北地方に多いのか考えてみました。

・　山林が多く蛇が実際に多い。
・　蛇を崇拝し敬う文化がある。
・　蛇行といわれるように林道や大きな川など、地域に曲がりくねっている目立つものがある。

などの意見が出ました。

実際にその名前の由来を調べてみると他に

・　地滑りした地肌が蛇の鱗のような見た目であることから、地滑りを起こすような急斜面を持つ土地には（蛇・じゃ）が付く傾向があることが分かりました。

確かに、山菜や山の動物が物語に多く登場する背景には山の存在があるものと考えられます。では、その数々の物語が、山を持つ土地柄に影響よるものとすると、地元にそびえる飯豊山そのものにも昔話があるかもしれない。と思い調べた結果、山岳信仰にまつわる話しは特に多いことがわかりました。

（飯豊山の山岳信仰より一部）

飯豊山にまつわる話
神代の頃、天照皇大神が天上を散歩し下界の風物を楽しんでいる時、かねてから豊葦原に（中の国）があると聞いた事を思い出し小手をかざして眺めて見たところ、それはそれは立派な国があるのでした。さっそくその国に保食神をつかわして、神の国から飯を出させて国を開きました。これが飯出、飯豊のはじまりと言われています。この神様は食物の祖神であって、主福神とも食稲魂神とも、また宇賀神とも御膳持若宇賀売命とも稲荷大明神ともいっております。飯豊山を中心にした土地は、米の多い国つまり米の沢と言うので、後の人々は米沢の国と名づけたそうです。 またこんな話もあります 昔、箱の口集落の猟人と、飯豊町高峰集落の猟人が飯豊山に猟に行きその美景と神秘さに心を引かれその地に神を祭ることにした。これをきっかけとして、飯豊山は山岳宗教の地として栄え、多くの参拝登山者が登った。この山は、女人禁制の霊山であり。飯豊山に参拝登山する人は、必ず２１日間、毎朝水垢離をすることになっていた。（水垢離【みずごり】とは、朝きれいな川又は泉に行き、水を浴び身体を清める事）精進料理を食べ２１日間は禁欲生活をつつしまなければなりません。そして２１日間努めた者だけが、飯豊の御山に登ることが許されたと言われている。

地区に伝わる話しでは

箱の口の人と飯豊山
箱の口集落の人が、御山に登山するときは、御山を開いた人が箱の口の人という事から、２１日間に及ぶ水垢離と禁欲生活がたった７日間で済み、かつ、精進料理はするが登山前には必ず、鰊（ニシン）の煮た物を食べる事になっていたという。 それは高い山に登る時には、体力をつけて登れと特別に神様からお告げがあり、箱の口集落だけの人達が、神様から許されていたという。 又、登山時に箱の口集落の人々がその一行に加われば絶対山は荒れないと言われていた。その他、箱の口集落の人が登山する時には必ず家に酒を作って登ったという。 そして、その人が登っているうちに家にいる人がその酒をあけてみると、不思議に、絶対この酒は失敗しないと言う。集落の人達はこれも農作神様のおかげだと言っていたそうである。 箱の口集落の人々が御山に登る時、必ず米を背負って行った。一行の中で疲れや、病気のため、倒れる者がいると、その人の頭に米をかける。その人はたちまち元気になり、一行に加わって登山できたという。

小松の人（川西町（隣町））と飯豊山
飯豊山の神は、小松のいやしい※母の腹から生まれるとともに山に登ったら、途中で母が死んで老母石になってしまった。という話しがあり、小松の人が登ると恋しさに雨風が起るという。

※いやしい・・地位や身分の低い

地元には有名な霊峰飯豊（いいで）山系がそびえており、その山は（飯が豊か）の名の通り稲作には欠かせない保水の役割を果たし農業水の安定した供給を担ってくれる、昔からかけがえのない存在であったのでしょう。さらに、ダムもなかった当時は、雨が続き山の持つ保水能力を超えた時、その大きな山の抱える保水量は洪水という形で現れ、家や小屋を容易に飲みこみ、牛や鶏といった家畜が鳴きながら流されいく。そんな光景を目の当たりにした時、底知れぬ恐怖心があったのではないでしょうか。水面に浮き、流される様々なものが鱗のように見え、水かさが倍にも増し泥水となり、蛇行しながら荒れ狂い流れるその光景を蛇の移動のように例えたのではないかと思いました。

恐怖の話や感動する話、面白い話というのは良くも悪くも心に残ります。そして私達もそうですが、そんな話はどうしても人に話したくなるものです。しかも、より面白く、より怖く聞いてもらうためにいろいろ背景が加えられるはずです。大筋の話があり、それがその土地その土地で脚色されていったと思われます。

一方“大人との約束を守らないと○○になる、子どもたちだけで川で遊ぶと○○に襲われる”などという、子どもへの戒めや、注意をひき教え諭す為のシンボルとする意味もあったのかもしれません。結果、広大で自然溢れる山の麓の村では、豊かな生活・健全な家庭が営まれており、家族の手伝いをしながら、また囲炉裏を囲むなどして物語を話すことで世代の違う子どもや孫とのコミュニケーションもあった理想の家族像が確立していたのではないかと思いました。

ストーリーを持たせることで文字として残さなくとも、話し（言葉）として伝えていくことができる。その上「教えられ、教える」ということを意識させないまま自然に伝わるというプロセスを持った、口承文化とは家族や地域の思いやりが詰まった素晴らしい伝承方法だと感じました。

（３）現地調査

①関連深いもの

ⅰ．越後街道（新潟では米沢街道と呼ぶ）

置賜（山形県）と越後（新潟県）を跨ぐ政治産業道・生活道として利用されていた。以前は小国からのルートは（小国～古渡～田代峠～八ッ口～沼）だったがこの道が出来たことにより（小国～足野水～玉川～大里峠～沼）にルートが変更される。

この街道は峠が多く１３もの峠を有していた為、１３峠と呼ばれている。明治１７年ごろ県令三島通庸によって小国新道が開設されたことにより人々の生活から遠ざかり荒廃していった。

当時物流は米沢からは、たばこ・青そ・小豆・ぜんまい・わらび・栗などを移出し、越後からは乾物や塩魚、珍しいものでは石油などが移入されていた。

またイギリスの旅行家イザベラバード女史は、この越後街道を下越方面から置賜盆地へ通過した。当時の様子は著書「日本奥地紀行」の中で紹介されている。

ⅱ．大里（おおり）峠

大永元年（１５２１年）に伊達植宗が開いた羽越国境の峠。その後、越後街道が整備されることになる。大里峠は標高が４８７メートルで宇津峠に次ぐ難所とされ新潟と山形の県境に位置し、当時、その道中には【助け】と呼ばれる宿屋兼茶屋が営まれていた。その跡地が今でも存在する。

また、明治７年には畑集落から銅鉱が発見され明治３５年に採鉱精錬が開始される。戦争によって銅の需要が急激に増え昭和９年には 300 人程が働いたが終戦を境に閉山となった。

山頂には大蛇伝説に基づいている地蔵堂があり大里大名神が合祀されている。大里峠という名前の由来は多く存在するが、大蛇伝説に関する一説では、大蛇さえ尾を折っていくほどの山道という意味から（尾折る→尾折り→おおり→大里）となったと言われている。

ⅲ．渡部邸

国の指定重要文化財とされている渡部邸は、財政難に苦しんでいた米沢藩に融資、幕末まで総額１０万両以上を用立て、急迫の同藩財政を救った豪農であり豪商の大庄屋である。全盛期には７５人の使用人がいたといい、1000 町歩（約 1000 ヘクタール）の山林を経営し、700 町歩（約 700 ヘクタール）の水田から約１万俵の小作米を収納したと伝えられる。

ⅳ．大里峠と渡部邸

大里峠には大里沢川に沿って古道がある。長雨時にはぬかるみも多くでき、荷の運搬等に支障をきたしたため、この普請は渡部本家にとって積年の計画であった。（大里峠以降の山形県側の一部の峠は米沢藩が藩の豪商や在郷有力者に人夫を供出させ敷石工事を実施した。）工事は 1851 年に始められ道幅６尺を３間に広げ、崩れた部分を切り開き、掘込み、道の左右に水流しの細掘を付けた。また長さ４尺・厚さ５寸の切石を 2360 枚を敷き詰めたこの事業に当時約 5000 人が携わった。とされている。

② 現地を歩く

ⅰ. 玉川太郎の投げた石と山賊が隠れた岩穴

２００９年６月　２日　渡辺競さんに案内をしていただきました。

ⅱ. 渡部邸

２００９年６月２３日

見学時には「平成の大修理工事」が行われており、床が外され土間がむき出しでした。大里峠の大蛇を退治しようと村人が集合し、鉄の杭を立てる計画を練ったと言われている母屋を見学し、ここの大黒柱はじめ各柱、天井の梁材は、ケヤキの巨木良材で組まれていることを教えてもらい、今回の工事で大黒柱の床下の部分が継ぎ足しされていたことが分かり関係者の方も驚いたことをお聞きしました。これから畳が敷き詰められると床下は一切見る事が出来なくなるということで本当にタイミングが良かったと思いました。普段は立入禁止の区間である２階から見下ろす、江戸時代中期京都より遠州流庭師を招き構築されたといわれる庭園は、現在の庭園と比べても豪華で、数々の草木が整然と植えられ、それらは丁寧に剪定されていました。藩にまで融資することのできる豪商と呼ばれた人たちの生活を顧みることが出来、今の時代に生まれていなかったらここには一生足を踏み入れることが出来なかっただろうと痛感しました。

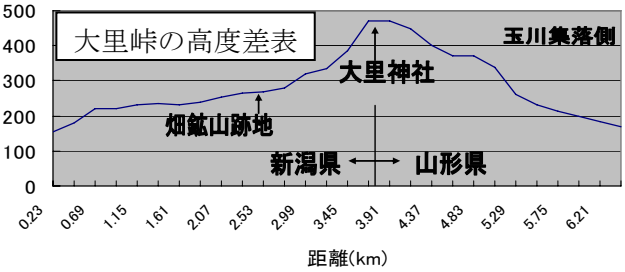
ⅲ.大里峠

行　程：学校～小国駅～越後片貝～
　　畑鉱山跡地～大里峠～大里神社～玉川集落～学校

２００９年７月３０日

渡部さんの案内で大里峠を歩きました。昔は山賊が隠れていた事を聞いた事もあり、うっそうと草木が茂る山道は少し不気味でした。途中、山ゆりが数多く咲き乱れている箇所や当時栄えていた畑鉱山の朽ち果てた外壁など。ここが生活道であった事を感じながらみんなと歩きました。ここはイザベラバードも歩いた道であることを聞き、どんな思いでこの風景を眺めていたのかと考えたりしました。結構険しいところもあり、ここが唯一の道とはいえ盲目であった、大蛇伝説に出てきたお坊さんが本当にここを歩けたのかとも思いました。旅をするそのお坊さんも実は、好奇心旺盛な冒険家だったのでしょう。頂上には事前に調べた通り神社があり、中を覗くとお地蔵様がそなえられていました。その前掛けは新しく、掛け替えてくれる人がいる事がわかり、その思いに少し嬉しくなりました。小雨の降る中でしたが皆で声を掛け合い、最後まで諦めず踏破することができました。

（国土地理院発行５万分の１地形図より）



（4）紙芝居作成

これまで調べてきた物語を実際に読み聞かせをして、実演を披露したいと話し合いました。しかし、私たちは後藤さんのように１人で何役も演じられない。また、長い原稿もスムーズに話せない、等の意見がでて、【語り】ではなく【紙芝居】を作成する事にしました。

当初パソコンを使って「デジタル紙芝居」と称し、挑戦するつもりでしたが、初心者の私達が手探りで始めから行うには時間がなさ過ぎるという理由で通常の紙芝居で表現する事にしました。

① 紙芝居を作る

ⅰ. 脚本（テーマを絞る）

作りたいテーマを絞る・登場人物の会話を考える・演じやすいストーリーにする。

ⅱ. コマ絵（展開のダミー作り）

紙芝居の展開のダミー作りをする＝「箱がき」・コマ絵で見て流れを検討する。

ⅲ. ひな形

（画面の）抜きの効果を検討する。

ⅳ. 試演

ひな型の紙芝居を演じて見てもらい、感想を聞く。

Ⅴ. 本書き

紙芝居のサイズの紙に本書きする。

② 紙芝居を演じる

ⅰ. 下読み

作品の組み立て方や、登場人物の性格や出来事などを掴む。

ⅱ. 声（せりふ・語り・擬音）

言い方次第で登場人物の心の動きや状況を観る人が感じるようにする手法を学ぶ。

・嬉しい時（やや高めの声で明るく） 楽しい時 （明るくはずむように）

・怒っている時 （強く早口） 悲しい時 （弱く・ゆっくり） など

ⅲ. 間（ドラマを生かす）

・期待させる間・・気持ちを誘い込む。

・余韻を残す間・・情感を漂わせる。

ⅳ. 抜く（動かす）

情景やテンポに応じて（普通・ゆっくり・はやく・さっと・途中でとめる）など

様々な紙芝居の手法を学ぶことが出来ました。幼稚園時代よく見た記憶がある紙芝居がこれほど奥深いとは思いもしませんでした。しかし計画する段階で時間がかかり思い通りに進めることが出来ませんでした。その間幼稚園が夏休みに入り、結果都合が合わず実演できませんでした。

４．調査を終えて

毎年、夏に関川村では「たいしたもん蛇（じゃ）祭り」ということでギネスブックにも認定されている、わら細工の大蛇をかついで練り歩く祭りが行われます。（今年は８月２８日～２９日）実は地元ではその大蛇が洪水から守ってくれたということになっており、多大な損害を蒙った羽越水害（８月２８日）の日にちなみ、その大蛇の全長を８２．８メートルとしその教訓を忘れないようにしているそうです。

この大蛇、①今回調べた大里峠の大蛇と関係しているのか？②大蛇になった【おりの】の野望、大きな湖を造ろうとした事と、この洪水の話はつながっているのか？というところまで知りたかったのですが、そこまで及びませんでした。今後、その関係性も明らかにしたいと思いました。

今回の調査を通して蛇に関する話が多いという理由は、その容姿・動きが不気味であったがゆえに印象深く、また、何か神聖な存在を感じさせる部分があることが要因ではないかと思いました。好きや嫌いはともかくとして、当時人は今以上に生活していく中で動物や自然（山の恵み）はとても身近な存在であったことがわかりました。環境整備がきちんとされている現在では野生動物は、昔ほど多く見られなくなったとお聞きします。とても残念なことです。

小国は野生の動物が数多く存在する自然に恵まれた環境だと思います。しかしこれは人間のエゴが少しあるのかもしれないと感じました。それは、人間の生活の利便性を優先させた結果、動物たちの生活空間を限定してしまい、棲みかを追い出された動物達が今度は、温暖化による気候の変動でエサ場としていた場所を今再び追い出され、エサを求め人間の生活範囲まで侵入しトラブルをおこす。そしてそんな場合、必ず一方的に動物が侵入者とされ非難されてしまうからです。動物たちにとっては過酷な状況です。今回調べた話にも動物達が数多く登場しました。どの種も欠けてはなりません。そんな大切なこの生態系をこのまま維持し、後世に言い伝えられるように環境問題にも強い関心を示さなければいけないと感じました。

最後に、調査を初める前は、私達が居なくなっても人間が存在する以上、伝承文化は生き続けるものだ。と、さも他人ごとのように感じていたのですが、しかし、自分も実は中継人であり、人の思いやる気持ちがないと、簡単に消えてしまう事もある、本当はか弱い側面を持つ存在であることに気がつきました。

私たちができる事とは何か？今はまだ分かりませんが、今回調べていく中で学んだことを基盤とし、探求し続けていくことからまずは始めてみようと思いました。

今回の調査にご協力を頂いた関係者の皆様　ありがとうございました。

山形県立小国高等学校１年　地域文化学

「雑誌Ｏｇｕｕで発信―白い森おぐにの恵み―」

班員　中塚　悠　今　唯乃　斎藤彰人　嶋貫湧馬　舟山健太郎　山口拓実

１　テーマ設定の理由

昨年度の雑誌「Oguu」の発行を受けて、今年も小国町の地域文化を学び、現在行われている小国町での活力ある活動や新たな魅力を雑誌「Oguu 第２号」で発信することを目的としました。特集のメインテーマは「白い森おぐにの恵み」としました。

２　調査の概要

（１）雑穀の取り組み・・・「特集１：雑穀のこころ」

・雑穀を用いた料理を作り、新メニューの開発への挑戦。

・町役場で、雑穀生産者への町での取り組みなどの取材。

・雑穀に対するアンケート調査の実施。

（２）小国北部の自然に触れる・・・「特集２：自然の恵み」

・町役場での取材。

・小国北部の「カクナラの森」での体験取材。

・「りふれ木工館」での取材と木工体験。

・「川遊び」について

３　特集記事概要

（１）「特集１：雑穀のこころ」

小国町で町おこしの一つとして取り組んでいる「雑穀」について特集記事を作ることにしました。

①　雑穀アドバイザー新野さんへの取材と雑穀料理新メニューへの挑戦

町内で雑穀アドバイザーとして活動されている新野伸子さんに取材を行い、６月２２日に「たかきび」を使ったカレー作りを行いました。「たかきび」は炊くとひき肉のようになり、肉を全く使わなくともそれと同じ食感を出すことができ、野菜と雑穀だけでヘルシーなカレーを作ることができることを実感しました。

さらに、新野さんのアドバイスを得て、「たかきび」と「もちきび」を使って新しい雑穀料理のメニュー作りに挑戦しました。（９月１６日小国高校調理室にて・写真）

新メニューを実際に食べての感想から

・「あんこやじんだん」と「たかきびやもちきびの生地」がマッチしており、味もよかった。

・形やいろどりを考えて作ったのが楽しかった。

・カラフルでかわいらしい感じで、雑穀に対するイメージが変わった。

・のどごしが良く、デザートなどにも使える。

この新メニューを「みれっと団子」と名づけました。

（「みれっと」（millet）は英語で「雑穀」という意味です。）

② 町役場への取材

１０月６日に小国町役場産業振興課瀬斉主任より、町で雑穀の生産者などへの取り組みなど次の内容について取材を行いました。

ⅰ 小国町が雑穀の生産に取り組むようになった経過

ⅱ 現在、雑穀の栽培について町としてどんな取り組みをされているか。

ⅲ 小国で生産された雑穀はどんな種類があり、どこで購入できるか。

ⅳ 一般の町民の方は雑穀についてどの程度関心をもっているか。

ⅴ 雑穀料理の利点はどんなところにあるか。

ⅵ 今後、雑穀を広めていくためにはどんなことが必要か。

特に、ⅳについては、③のアンケート調査を行うこととしました。

③ 雑穀に関するアンケート調査

１０月１０日(土)の午後、「道の駅白い森おぐに」「道の駅いいで（めざみの里）」「白い森ショッピングセンター　アスモ」の３カ所で次の内容についてのアンケート調査を行い、計１６９名より回答を得ました。

ⅰ 質問項目

性別、出身地、年齢

Ｑ１．雑穀を知っていますか？

Ｑ２．雑穀を使った料理を食べたことがありますか？

Ｑ３．家で雑穀を使った料理を作ったことがありますか？

Ｑ３で、『ある』と答えた方は、どんな雑穀を使って、どんな料理を作りましたか？

Ｑ４．小国町で雑穀を生産していることを知っていますか？

Ｑ４で『知っている』と答えた方は、小国町で生産された雑穀を購入したことがありますか？

ⅱ調査の結果

性別		出身地			年令							
男	女	小国町内	山形県内	山形県外	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
59	110	60	51	58	20	14	21	41	21	31	18	3
35%	65%	36%	30%	34%	12%	8%	12%	24%	13%	18%	11%	2%

Q1：雑穀を知っているか。				Q2：雑穀料理を食べたことがあるか		Q3雑穀料理を作ったことがあるか	
1 よく知っている	2 知っている	3 あまり知らない	4 全く知らない	1 はい	2 いいえ	1 はい	2 いいえ
22	97	36	14	111	58	65	104
13%	58%	21%	8%	66%	34%	38%	62%

Q4：小国町で雑穀を生産していること		小国町の雑穀を購入したことがあるか。	
1 知っている	2 知らない	1 ある	2 ない
56	113	26	30
33%	67%	46%	54%

どんな雑穀料理を作りましたか。
（Q3で、はいと答えた方の回答）
・ごはん（36名）
・シチュー（6名）
・ハンバーグ（4名）
・カレー（3名）
・雑炊（2名）、クッキー（2名）
・この他に、
チャーハン、コロッケ、オムライス、だんご
などがありました。

ⅲ　アンケートの結果についての考察

・雑穀を「知っている」と「よく知っている」で７１％、「雑穀料理を食べたことのある」人は６６％と多いが、それに対し雑穀料理を作ったことがある人は意外に少ない。

・雑穀を知っていても、小国で雑穀を生産していることを知っている人は少ない。

・小国の雑穀を購入したことがある人は、ほとんど小国町内の人でした。（県外の方には、小国町自体を知らない方もいた。）

・雑穀料理のメニューは、十六穀米などをごはんに炊いたりまぜたりする人がほとんどで、その他のメニューは少なかった。

・全体として、まだまだ広がりが不足しているという感じがしました。

（２）「特集２：自然の恵み」

昨年のオグーの特集では、小国南部の「温身平」の森林セラピー体験が記事として掲載されていましたが、今回は小国北部の「カクナラの森」「白い森木工館」「川遊び」についての特集記事を掲載することにしました。

①　町役場での取材

７月２７日に小国町役場産業振興課渡部主事より、小国町の自然および、「温身平」「カクナラの森」「白い郷土の森」などのトレッキングスポットについての話をお聞きしました。この話をもとに、８月１９日に「カクナラの森」に実際に行ってみることにしました。

②　カクナラの森を歩く

８月１９日に、町の白い森案内人である斎藤重美さんから同行していただき、「カクナラの森」を体験取材しました。斉藤さんは森林管理者で小国北部のマタギの中心メンバーです

角楢小屋前にて

吊り橋を渡る

「りふれ」（小国町五味沢）で斎藤さんとおちあい、そこから徳網の集落を過ぎて車で約１０分ほど行くと車道終点に出ます。そこから徒歩で角楢（カクナラ）小屋まで約１時間半のコース。途中、３つの吊り橋を通り、ブナの原生林（白布平）を通り角楢小屋に到着。昼食後、案内人の斎藤重美さんへの次の内容の取材を行いました。

ⅰ　カナクラの森のよさは何か。そのよさをＰＲするにはどうすればよいか。

ⅱ　カクナラの森の楽しみ方について。

ⅲ　森で注意しなくてはならないことは何か。

ⅳ　カクナラの森のオススメの場所はどこか。

ⅴ　「マタギ」の人たちは、森でどんなことをしていたのか。「マタギ小屋」をどんな風に使っていたか。

ⅵ　最近山で変わったことはあるか。（ナラ枯れの被害など）

取材の結果わかったこと。

ⅰ　カクナラは小国の中でも最高の原生林が残っており、巨木のそろうブナ林も間近で見ることができる。

ⅱ　途中にある３つの吊り橋では、足元に広がるきれいな川を楽しむことができる。

ⅲ　登山者のみならず、山菜採り、キノコ採り、釣り客など町内を問わず県外の方も多くこの森に入っている。（入山者が増えたことで、木に傷つけたりゴミを残していったりするマナーの悪さが最近目立ってきた。）

ⅳ　ナラ枯れの被害が広がり深刻な事態であること。

③　白い森木工館での取材と木工体験、川遊び

６月３０日、木工体験のできる「白い森木工館」（小国町大字五味沢）を訪問し、木工館の高橋英二さんに取材を行いました。取材の後、私たちも実際に木工体験を行ってきました。周辺には、「白い森交流センターりふれ」や「白い森オートキャンプ場」があり、さまざまな自然体験ができる施設があります。高橋さんに次の内容で取材を行いました。

ⅰ　木工館をはじめた経緯。

ⅱ　どんな木を使い、どんなものを作っているのか。

ⅲ．　年間の利用者数と利用者層などについて

ⅳ　.木工館の良さについて

ｖ　自然保護のために何か取り組んでいること。

また、小国町のもう一つの自然の魅力「川遊び」について、荒川および川に住む魚など紹介するページを作成しました。

４　活動のまとめ

（１）　特集１「雑穀のこころ」では、雑穀に対する町の取り組みを知ることができただけでなく、新野さんのアドバイスを得て雑穀料理の新メニューを作ることができ、新野さんや町の方々の雑穀への熱い思いを感じました。さらに、アンケートの結果などから今後雑穀の PR と広がりが必要と感じました。

（２）　特集２「自然の恵み」では、貴重な原生林をもつ小国北部の「カクナラの森」のことや、りふれ・木工館・川遊びなど小国ならではの自然体験を知り、是非「オグー」で広く発信したいと思いました。

（３）取材・調査を行っての感想（個人毎）

今回の活動では、たくさんの体験ができたと思います。初めて雑誌の編集をし、みんなで一日アンケート調査をしたり、新メニューを作ったり、大変なことばかりだったが、とても達成感の残る経験でした。（中塚　悠）

オグーの制作に関わって、改めて小国の良さを確認することができました。小国の自然や恵まれた環境を知ることができました。オグーの制作に関わることができて良かったです。（嶋貫湧馬）

「川遊び」を中心に調べてみて、いろんな魚の種類を知ることができたし、魚の捕り方いろいろと知ることができました。（舟山健太郎）

カクナラのページを担当して、雑誌を作る難しさを知ることができました。文字の大きさ、写真の配置、文章の構成などを考えなければならず、予想以上に大変な作業だということがわかりました。（斎藤彰人）

自分の住んでいる地域の良さをあらためて知ることができて良かったと思います。小国の自然や風景は昔から変わらず、美しいままでとても感動しました。これからも地域の良さ伝えていきたいと思います。（山口拓実）

オグーを作って、小国町の魅力をたくさん知ることができ、みんなに自慢したくなりました。また、文化は創った人がいるから伝わったのだと教わり、これからもっと私たちで新しい文化を創り増やしていきたいと思いました。（今　唯乃）

最後に、取材に協力いただいた方々へこの場をかりて厚く御礼を申し上げます。

山形県立小国高等学校１年　地域文化学

「飯豊山について」

班員　伊藤赤威　齋藤克哉　渡部竜平
小嶋浩都　齋藤彰人　八幡秀勝

１．テーマ設定の理由

飯豊山について調べたいと思い、このテーマを設定した。

２．調査の方法

（１）町の図書館に行き調べた。
（２）インターネットで調べた。
（３）飯豊の岩倉神社に行き調べた。
（４）飯豊山碑のところに行き拓本を取った。

３．調査の結果

（１）飯豊山の歴史について

①飯豊山神社の由来

飯豊山神社は、白雉３年（６５２年）知道(又は智道）和尚と役小角（えんのおづの）が飯豊山に登り、山容より飯豊山と名付け、五王子をまつったことに由来する。

②飯豊山の修験道の起こり

祖先の霊は天に近い高山に宿って、ここから子孫の生活を見てくれるという思想 。

人はついに祖先の霊の山に分け登って、祖先の霊と合体することによって有限の生命を無限のものとすることができると考えた。

高山を登り苦難を克服するところに修験道が生まれたとされる。

③置賜地方の飯豊山碑の年代別数

年代別の石碑数から文政と天保に作られた石碑数が多いことが分かる。

このことから文政と天保の年号から飯豊山信仰が盛んになってきたことが分かる。

（２）飯豊山の自然と登山道

①小国からの登山道

小国からのルートは３つある。

現在は梅花皮小屋からのルートが主流。

昔は大日杉小屋（飯豊）のルートが主流だった。

②登山道に咲く植物（花）

飯豊山の花	花期	説明
イイデリンドウ	7～8月	イイデを冠した飯豊の固有種。
ハクサンコザクラ	7 月	湿った草地に群落をつくる多年草。
シナノキンバイ	7～ 8 月	湿り気のある高山草原に生える。
チシマギキョウ	7月	花びらのふちに多数の白毛がある。
チングルマ	7～ 8 月	高さ１０ｃｍ程の小低木。
ミヤマリンドウ	7～ 8 月	高さ５～１０ｃｍの花でイイデリンドウより比較的群落を成す。
ハクサントリカブト	7～ 8 月	猛毒をもつことで知られる。
マイズルソウ	6～ 7 月	本来は針葉樹林帯に多く生える。
ハクサンチドリ	7～ 8 月	高山、草地に生え鮮やかな赤紫色をつける。多年草。
ヨツバシオガマ	7～ 8 月	高山草原に生える鮮やかな赤色の花。
タカネマツムシソウ	8 月	マツムシソウの高山種。２年草。
コバイケイソウ	7～ 8 月	湿地を好む大型の花。
サンカヨウ	6～ 7 月	ブナ林でよく見る。高さ５０～６０ｃｍ。
ハクサンイチゲ	6～ 8 月	稜線一帯に広い群落を見せる。
ミヤマコゴメクサ	8 月	草丈も花も小さい。高山帯にびっしり群生する。
イワカガミ	6～ 7 月	高山に群生する常緑の多年草。岩場に多く生える。
イブキトラノオ	7～8月	日当たりの良い草原に群落をつくる。高さ５０～１２０ｃｍほど。
シラネアオイ	5～ 7 月	沢筋から稜線付近まで、雪解け後に広く見かける。
ヒメサユリ	5 月	山地、草原に分布する。香りのよい花が咲く。絶滅危惧種に指定されている。

③観光資源としての飯豊山

飯豊山には沢山の花があり、その花１つ１つが小国にとっての観光資源。

４．成果や今後の課題（まとめ）

今回、私たちは地域文化学を通してわかったことは、三つあります。

まず一つ目は、飯豊山神社の由来がわかりました。その由来は、白雉３年（６５２年）知道和尚と役小角が飯豊山に登り、山容より飯豊山と名付け、五王子をまつったと言われていることがわかりました。知道和尚については不明で役小角は後に修験道の開祖となることがわかりました。

二つ目は、飯豊の修験道の起こりです。飯豊の修験道の起こりは、祖先の霊は天に近い高山に宿って、ここから子孫の生活を見てくれるという思想があることがわかりました。

人は、最後に祖先の霊の山に分け登って祖先の霊と合体することによって、有限の生命を無限のものとすることができる、と考えたそうです。

三つ目は、置賜地方の飯豊山碑の年代別数を調べてわかったことです。置賜地方の飯豊山碑は文政と天保に作られた物が多いことがわかりました。このことから、文政と天保の年代から飯豊山信仰が盛んになってきたことがわかりました。

（１）成果

・小国からの飯豊山への登山道が３つある。
・飯豊の登山道を合わせると山形県で合計４つある。
・飯豊山には有名な花が２つある。（イイデリンドウ、ヒメサユリ）

（２）今後の課題

今後の小国町の発展のため、歴史や自然が豊かな飯豊山を多くの人に知ってもらえるようにチラシなどでもっとアピールしたいと思う。

５．感想（個人別）

（伊藤赤威）

今回、この地域文化学を通して飯豊山の歴史について様々なことを学ぶことが出来ました。飯豊山神社の由来や飯豊の修験道の起こりが分かりました。置賜地方の年代別の石碑数から文政と天保の年号から飯豊山信仰が盛んになったことも分かりました。

私は、今回飯豊山の歴史について調べてみて、たくさんのことがわかったので、これからの生活で活かしていけるようにしたいです。まだ、飯豊山の歴史について調べたいことがたくさんあるので、これからも調べていきたいです。

（齋藤克哉）

今回、地域文化学で私たちは、飯豊山の歴史と飯豊の自然と登山道といった二つの班に分かれて学習しました。僕は、飯豊の歴史について学習しました。飯豊神社の由来や何で飯豊山と名づけたという事もこの学習でわかりました。祖先は天に近い高山に宿ったという事もわかったし、普段、飯豊山の歴史の勉強はしないのでとても良い学習ができました。

（渡部竜平）

今回、この地域文化学を通して飯豊山の歴史について色々なことを学ぶことができました。飯豊山の歴史や修験道の起こり、飯豊山神社の由来や置賜地方の飯豊山碑の年代別数がわかりました。

私は今回の地域文化学で、普段調べられない飯豊山の歴史について調べる事ができて、とてもいい学習になりました。また歴史を調べる機会があったらもっと調べてみたいと思います。

（小嶋浩都）

今回、私はこの地域文化学で、飯豊山の登山道と飯豊山に咲く高山植物について調べました。また、飯豊山碑の拓本を取り、飯豊の岩倉神社に取材にも行ってきました。

今回、飯豊山についていろいろと学習してみて、飯豊山には有名な花があることや、飯豊山は福島県に属していること、飯豊山に登る登山道は小国からは３本あることなど、飯豊山について今まで知らなかったことがたくさん知ることができ、大変いい学習ができたと思っています。

これからは、飯豊山についてもっと深く知り、飯豊山を観光客がたくさん来るような山にしていきたいです。

（齋藤彰人）

今回、私は地域文化学を通して小国の飯豊山や飯豊山に咲く花についてたくさんのことを学ぶことができました。小国町から飯豊山に行けることは、知らなかったけど調べていくうちに、小国町からも飯豊山に行けるということがわかりました。

次に、飯豊山に咲く花について調べました。飯豊山には、さまざまな花が咲くけど、その中でイイデリンドウとヒメサユリについて調べました。調べて行くうちに、イイデリンドウとヒメサユリが飯豊山にしか咲かない花だと言うことが分かりました。

私は今回飯豊山について調べてみて、もっと飯豊山について調べてみたいことがたくさんあったので、これからも調べていきたいと思います。

最後にお忙しいのに私たちのために飯豊山のことを教えてくださった原先生、市川先生本当にありがとうございました。これからは、調べてきたことをいかして頑張って行きたいと思います。

（八幡秀勝）

今回、地域文化学で飯豊山について調べてみて、今まで知らなかった飯豊山のことにつて知ることができました。例えば、飯豊山の登山道は小国だけで３つもあるということです。これには、とても驚かされました。また、修験道や、飯豊山のこともわかってよかったです。

この地域文化学を通して私たちが知らないことがわかってよかったです。そして今回のことでわかったことを、これからの生活に生かしていきたいです。

山形県立小国高等学校１年　地域文化学

「豊かな自然と小国の人々」

班員　安部智大　猪野本気　佐野聡美　玉垣智裕　長瀬茜　舟山美乃里

１．テーマ設定の理由

現在、小国町は人口減少や少子高齢化という厳しい現実に直面しています。私たちは小国町を元気にするためにまちづくりについて学びたいと思いました。小国町には広大な自然、そしてそれとともにある人々の暮らしが存在します。その価値を見直し、最大限に活用することが大切だと考え、このようなテーマにしました。

２．調査の概要

（1）小国町の位置づけと特色
（2）小国町および近隣の町で行われているまちづくりについて
（3）東部地区に移住された方々との交流会を通して

３．調査の結果

（1）小国町の位置づけと特色

①小国町の人口・面積・人口密度

小国町は面積が 737.55 平方キロメートルあります（県内第 2 位で県全体の 7.9%）。人口は 9,118 人（平成 21 年 6 月時点）で県内第 25 位、人口密度は 12.4（人／平方キロメートル）で、県内で最も低い数字です。これほど広大な面積を有していながら、人口が少ないのはなぜなのでしょうか。原因として考えられることは、次のようなことだと思います。①森林の 65%ほどが、人の手が入っていない天然林であり、居住に適した場所が少ない。②豪雪地帯という自然環境の厳しさ。

しかしこの条件の厳しさも、裏を返せば、小国町がそれだけ豊かな森林資源や水資源に恵まれていることの証だということを忘れてはいけません。

②小国町の特色

小国町の特色というと、たくさんの自然に囲まれていることが挙げられます。町の 94%を占める森林は、その 8 割がブナを中心とした広葉樹林です。広大な森林は、きのこや山菜、木の実などの食材をもたらすだけでなく、あけびやまたたびのつるを利用したつる細工、豊富な木材を利用した木工品など、小国町の様々な特産品を生み出します。

小国の人々はこの豊かな自然に根ざした生活の中で、独特の文化・技術を生み出してきました。具体的にはマタギの文化や、山火事を起こすことなくわらびの山を焼く技術などです。人が関わり、森を守ることで質の高い森林が維持されています。平成 18 年 4 月には、「温身平」が日本初の森林セラピーの森に認定され、「日本で一番質の良い森」と大絶賛されたそうです。

（2）小国町および近隣の町で行われているまちづくりについて

私達は小国町のまちづくりについて考えるにあたり、近隣の町についても併せて調べてみようと思いました。理由は、他の町と比較することで小国町のまちづくりの特色や独自性が際立つと考えたからです。また、小国町の課題や見習うべきことが見つかるかもしれない、と考えたからです。調査対象は飯豊町と川西町です。

①小国町のまちづくり　人と自然が織りなす　やさしい暮らしがあるまち“白い森の国おぐに”

小国町役場総務企画課の佐藤友春さんと産業振興課の渡部寿郎さんのお話をうかがいました。

小国町のまちづくりのキーワードは**「奥地から元気に」「地元の価値づけ」**です。小国町は北から南の端まで５０キロメートルあり、北端南端の集落については町の中の人でさえもよくわかっていないことがあります。役場や病院などの施設は中心部に集中し、町の端にあたるところはやはり不便が多いものです。だからと言って中心部から離れた集落がどうなってもよいかというとそうではありません。端の集落の元気がなくなると、その近くの集落も元気がなくなり、結果として中心部の元気もなくなると考えられるからです。そこで小国町では奥の集落（小玉川や大石沢など）をいかに活性化させるかがとても重要なことだと考えています。特にそのような集落には、山を守るマタギの文化や、風を見て火をコントロールしながら火事を起こすことなくわらびの山を焼く技術など、小国に住む人でさえも知らない文化や技術が存在します。小国町にしかないものを見直すこと、つまり「地元の価値付け」が非常に大切です。

【奥地から元気にするための交流居住イベントの例】

マタギ集落の四季体験ツアー冬編（小玉川）	１月中旬	歳頭焼き、餅つき、かんじき歩き
マタギ集落の四季体験ツアー早春編（小玉川）	３月中旬	マタギ生活塾講座、かまくら体験
マタギ集落の四季体験ツアー春編（小玉川）	５月中旬	わらびの山焼き、森林セラピー
マタギ集落の四季体験ツアー夏編（小玉川）	８月下旬	焼畑カブ植え体験、森林セラピー
マタギ集落の四季体験ツアー秋編（小玉川）	11 月上旬	カブ収穫漬け込み体験、森林セラピー
実（みのり）の学校（五味沢）	10 月中旬	きのこ狩り、芋煮会、集落散策

【質問１】　<u>他県や他市町村の方々に発信していきたい小国町の魅力は何ですか。</u>

【回　答】　やはり自然です。そして人と自然のつながりです。それが見えるように情報を発信して行きたいと思っています。

【質問２】　<u>Ｉターン者誘致のために特に力を入れていることは何ですか。</u>

【回　答】　定住や移住促進の方法はいろいろあります。たとえば「お金をあげるから来てください」という方法もあります。でもそれは小国町では難しい方法だと思います。仕事や病院、学校などの生活基盤をどうするか、そして小国町は豪雪地帯というような不利な条件もあり、お金をもらったからと言って簡単には決められないものです。そこで小国町としては、「とりあえず来てもらう」ことを重視しています。ちょっと来てくれる人、良さを認めてくれる人をまず増やしたい。そして何日間か小国で過ごすことで、いろいろな人と知り合いになってもらう、つまり**人と人とのつながりを作る**のです。人と人とのつながりができれば、必ずその人はまた小国町を訪れると思います。知り合った人たちに会いに。また、小国町に来て地元の生活や文化を見たり体験したりしてもらうことで、その地区にある文化の奥深さを知ってもらい、**他地区の方々の口から「小国町ってすばらしいね」という話が小国町の住民に伝わればよいと考えています。そうなることで、他地区から見た小国の良さに小国町民が気づき、町を見直すきっかけになればよいと思います。**

【質問３】　<u>小国町に来る人は何を目的に来ていると思いますか。</u>

【回　答】　自然の中で暮らしたい人や、自然に暮らす人のことが好きな人、山に登るのが好きな人など、自然に関わる理由で来ている人が多いと思います。それと、自然を好きな自分を認めてくれる小国の人たちのことが好きだ、という人もいます。森林に癒しを求める人もいます。

②飯豊町のまちづくり　田園の息吹が暮らしを豊かにするまち

飯豊町役場総務企画課、後藤洋さんと船山真紀さんのお話をうかがいました。

飯豊町のまちづくりのキーワードは「<u>**住民参加**</u>」です。「住民参加」とは、まちづくりを住民とともに進めることです。飯豊町では小さな地区単位（「大字単位」とおっしゃっていました。）で自分たちの地域の計画を立てるようにしているそうです。「音楽からのまちづくり」「SNOWえっぐフェスティ

バル」などは、実際に町民の意見から開催されることになったものです。

【質問１】　他県や他市町村の方々に発信していきたい飯豊町の魅力は何ですか。

【回　答】　自然や田園山居集落の景観（農業があって人の暮らしがある、昔ながらの景観）、里山文化や獅子祭りなどの郷土芸能です。中津川地区に来る方々は「そのまま残してほしい」と言います。他の県の方々から見ると私たちが当たり前と思っている自然は特別なものです。その魅力を発信していきたいと思います。

【質問２】　飯豊町をよりよくするために、改善していきたいと思うことは何ですか。

【回　答】　人が集まって話し合えるような場所と時間をとることです。

【質問３】　転入者を増やすために力を入れていることはなんですか。

【回　答】　住宅団地の整備や産休明け保育などの子育て支援、新規就農者支援、「定住いいですね条例」による奨励制度などを行っています。

【飯豊町のまちづくりを学んでの感想】

飯豊町では、町内で結婚・出産した人に祝い金を贈ったり、定住奨励のためにお金を贈ったりしていますが、小国町ではそのような取り組みは行われておらず（※）、町に人が残りにくいような環境だと思いました。小国町でもこのような取り組みをしていけば、町に定住してくれる人の数にも変化があると思いました。

※　小国町でこのようなことが行われないのは、（前の話にも出ていましたが）お金を贈るだけでは定住増加はあまり期待できないという判断があるからだそうです。その代り、就職斡旋などに力を入れているそうです。（小国町役場産業振興課　渡部寿郎さん）

③川西町のまちづくり　　人かがやきダリヤと文化が咲き誇るまち

川西町役場協働のまちづくり課、嶋貫順一さんと井上憲也さんのお話をうかがいました。

川西町のまちづくりのキーワードは「**協働**」です。町の議員定数や職員が少なくなる中で、今まで行政が行っていたものを、町民やＮＰＯ、ボランティアの方々の力を借り、それぞれに役割分担をしながらまちづくりを進めようというものです。地域を皆でもう一度見直し、新たな可能性や希望を「発見」し、「協働」によって地域を再生、発展させることを目指しています。また、「**交流**」にも力を入れており、社会教育の拠点であった地区公民館を「地区交流センター」と改め、活動の幅を広げることで「地域づくり・人づくりの拠点」としようとしていることがわかりました。

【質問１】　他県や他市町村の方々に発信していきたい川西町の魅力は何ですか。

【回　答】　観光面では日本一のダリア園、文化面ではフレンドリープラザ（作家井上ひさしとのつながり）、そこで上演される質の高い演劇などがあります。また、自然や農作物などもすばらしいものがありますが、ＰＲの仕方を工夫する必要があると思っています。

【質問２】　転入者を増やすために力を入れていることはなんですか。

【回　答】　なかなか具体策がないのが現状です。まずは交流を中心に取り組んでいます。「やんちゃ留学」（東京町田市の子ども達が１年間東沢地区に来る）を受け入れたり、「東京川西会」に町のＰＲをしてもらったりしています。

【川西町のまちづくりを学んでの感想】

川西町で行っているやんちゃ留学のように、他の地域の子どもたちに、その町について知ってもらうということはとても良いことだと思います。小国町でもそのようなことを検討中ということでしたので、ぜひ実現してほしいと思います。また、小国町の子が都市部に行く（やんちゃ留学の逆）ことで、町の良さを見直すこともできるかもしれないと思いました。

（３）東部地区に移住された方々との交流会を通して

①東部地区を調べようと思った理由

小国町は人口が減っており、深刻な問題です。人口減少は少子高齢化もあり、避けられない現実です。（10 年後には 8,000 人を切ると言われています。）したがって次のような考え方も大切です。「これからは、少ない人数の中で、これまで行われてきた地域行事や生活をいかに続けるかという観点も必要になります。」（小国町役場・佐藤友春さん）

同時に、町民を増やす努力もやはりしなくてはならないと思います。「人口規模が大きくなれば暮らしやすさは向上します。人が住んでいるということは大切なことです。」（小国町役場・渡部寿郎さん）いろいろな方法が考えられると思いますが、今回私たちは県や他市町村から移住してきた方々にお話をうかがい、移住者を増やす取り組みについて考えたいと思いました。

その中でなぜ東部地区（叶水や大石沢）かと言うと、町づくりについて調べていく中で、東部地区には空き家がなく、Ｉターン者も多いというお話をうかがったためです。東部地区に多い理由について、小国町役場の渡部さんは「キリスト教独立学園高等学校があるからだと思います。キリスト教独立学園は県外からの入学者も多く、他地区との人のつながりがあることが挙げられます。移住した人を頼り、移住してくることもあります。また、東部地区の方々は多様性を認めてくれる人や、困っている人に耳を傾け、手を差し伸べてくれる人が多いと思います。」とおっしゃっていました。

②東部地区に移住された方々との交流会

水源の郷交流館を会場に交流会が行われました。出席者は山口ひとみさん（鳥取県出身）・増田景子さん（山形・村山市出身）・上農尚美さん（熊本県出身）・石原忍さん（東京都出身）・吉田久美さん（愛知県出身）、そしてまちづくりについて学ぶ法政大学の学生さん３名でした。

【質問１】　小国町に抱いた印象は何ですか。

【回　答】　・スーパーに行く前に隣の家に借りたり、もらったりなど、他ではできないことが出来ます。
・こちらも頼り、相手も自分を頼ってくれる、お互いの存在を大切に思える気がします。
・人と人との間にいい距離感があると思います。相手を気にしつつも口出ししすぎない。何か変わったことをしていても受け入れてくれます。
・みんなが子どもたちのことを見守ってくれている気がします。
・ありのままの自分を受け入れてもらえる気がします。

【質問２】　なぜ小国町に住もうと思ったのですか。

【回　答】　・（都会で失われてしまった）コミュニティーを感じたからです。
・世話好きな人がたくさんいるからです。
・子どもをこの地で育てたいと思ったからです。

【質問３】　小国町の魅力は何だと思いますか。

【回　答】　・「人」ですね。人が財産です。
・自然です。自然がくれるものの豊かさを感じます。
・食文化の豊かさです。保存食の文化には感動しました。
・都会は大量消費社会でした。お金がないと住んでいけない、消費し続けることを求められる気がしました。でも小国町はお金が少なくても生活できます。
・自分が年をとった時や子育てする時、心地よく生きていける場所だということです。

【質問４】　町をもっとよくするために、改善すべきところは何だと思いますか。

【回　答】　・定住や移住する際の支援や紹介など、町の**バックアップ**が必要だと思います。飯豊町はすごく良かった。
・道の駅をもっと良くするとか、小国と言えばここと言えるような場所を作ることです。あと、体験などができる場所を作るといいのでは。木工館はあるけど、遠い・・。中心部にあれば・・。
・ＰＲの仕方が悪いのではないでしょうか。
・小国の魅力に小国の人自身が気づけばもっと活気溢れる町になると思います。本当にすばらしいところなのに、小国の人がそれを誇りに思っていないような気がします。

【交流会を通しての感想】

小国は他県より恵まれていると思いました。なぜなら小国では、人のつながりを大切にしているからです。他県では、人のつながりが薄いと聞いて驚きました。また、普段何気なく生活している中にこそ、たくさんの魅力があったことにも気付かされました。小国町役場でお話をうかがった際、「町の端から活気づけることが大切。」とおっしゃっていました。一方で、「中心部に観光の目玉を」

とみなさんはおっしゃっていました。お互いの考えを理解し合いながら、小国町全体が一つになれるような取り組みが大切だと思いました。

４．成果や今後の課題

これまで、小国町の魅力やまちづくりについて、隣町との比較や、他地区出身者の方の目を通して学んできました。その成果の一つとして、「まちづくりワークショップ」を体験し、自分たちでアイディアを出してみようと考えました。この「まちづくりワークショップ」は、平成１９年度に第４次小国町総合計画策定のために、役場や、町内の各層・各分野の方々が参加して実際に行われたものです。体験や作業、話し合いを通して町の課題を抽出し、その解決策の検討が行われました。今回私たちは、その「まちづくりワークショップ」を、役場の佐藤友春さんにご指導いただきながら体験してきました。今回は体験版ということで、実際に町で行われたものよりも簡略化したものでしたが、とても勉強になりました。

①方法・手順

地域資源の洗い出し（ポストイット１枚に１つを書く）
グルーピング（地域資源を分類する）
地域資源の生かし方をみんなで検討
アイディアを発表し、感想を述べる

②実際に出された主な地域資源（グループごと）

人柄　　…元気、優しい、頼れる人がいる
冬　　…スキー場、ウィンタースポーツ、雪、寒い
川の恵み…魚、釣り、川、川で泳げる、岩魚、岩魚ランド
自然　　…森林セラピー、森林、ブナ、山、自然、紅葉、けんしゃ山、田んぼ、温身平
施設　　…アスモ、キリスト教独立学園高校、ゆーゆ、ダム、バンガロー、木工館、りふれ　etc..
山菜　　…わらび、山菜、わらび園
きのこ　…なめこ、とびたけ、まいたけ、さるのこしかけ
温泉　　…川入荘、梅花皮荘、松風館
伝統行事…沖小歌舞伎、古田歌舞伎、熊祭り、歳頭焼き
地域行事…地域で参加する運動会、サマースポーツ

③私たちが考えた地域資源活用法

・秋の自然まんきつあー；きのこをとりながら紅葉を満喫し、民宿や温泉に泊まる。
・小玉川岩魚釣り大会；釣り大会。上位者には賞品。大会の後は、みんなで塩焼きをする。
・小国の自然を満喫しようツアー；四季折々の行事＋森林セラピー＋バンガロー宿泊
・田舎に泊まろうツアー…農家に泊まり、伝統的な食べ物や行事などを体験する。
・小国雪合戦大会…小国高校グランドで地域対抗の雪合戦大会、その後温泉で交流。
・木の実を使った料理を駅などで売る。
・小国の生き物の博物館を作る。

④最後に

今回の調査やワークショップをとおし、**小国町には、自分たちも気づいていない魅力がたくさんある**ことを知りました。また、**町の豊富な地域資源をうまく活用できておらず、まだまだ私たちにできることはある**とも感じました。今回のことをきっかけに、小国の良さを私たち自身が積極的に見直し、また、他の地域の人にもそれを伝えることができるようにしたいと思います。

大川健嗣先生、調査にご協力いただいた町内外の皆さん、本当にありがとうございました。

山形県立小国高等学校１年　地域文化学

「小児看護学～遊びの大切さを知り、子どもが健康な町づくりをしよう～」

班員　　遠藤菜津美　齋藤真莉子　伊藤愛里　平田美咲　長谷川由美　渡部日生

１．テーマ設定の理由

現代の子ども達は外で遊ぶことがあまりなく、室内でゲームなどをしている子どもが多いようです。そのため、外で遊ばなくなり年々肥満児などの体格のよい子供が増加し、また、体は大きくなっても体力の低下によってすぐに疲れてしまう子どもが多くなりました。私達はこのような子供たちを減らすために、「遊びの大切さを知り、子どもが健康な街づくりをしよう。」というテーマを立てました。これらを通して、子育て支援で小国町の自然を活かした子育てや子どもの健康なからだ作りをアピールしたいと考え、このテーマを設定しました。

２．文献学習

最初に遊びの意義や健康とのかかわりについて文献学習を行い以下のようなことがわかりました。

（１）遊びの定義と意義

ホイジンガ（Huizinga．J）が人間を「ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）」と定義したように、遊びは人間の重要な特徴の一つです。「楽しみや喜びを求め、自由で自発的な、創造性に富んだ活動で、日常の生活から切り離された強制的でない活動である。」と定義されています。

（２）自然の癒しが子どもの危機を救う

子どもを自然の中に連れ出して自然の中に子どもをおいてあげることによって子どもの心が安らぎ、癒されて、正常な心的状態に回復します。

（３）体験を通して社会力を育てる

社会では、本音でぶつかりあわなければならない場面も出てきます。これが学校や地域での仲間関係との違いであって、深い仲間意識が形成されます。

（４）冒険が子どもを変える

自然の中での遊びや冒険は、子どもの能力と限界を教えてくれます。また、自然のルールが存在し、自然といかに調和し、いかに利用していくかを身につける機会になります。冒険は、子どもたちが将来社会に立ち向かっていくために役立ちます。

（５）自然環境教育は感性からはじまる

感じたことを自由に表現することが子どもの感性を育てます。それは、審美性、感動、イメージ、創造力・興味、気づき、直観、生命の尊重などです。

３．訪問聞き取り調査

小国町の自然体験や野外活動への取組を聞くためにおぐに町総合開発センターを訪問し、また保育園における園児の遊びの現状を知るために白百合保育園とすみれ保育園の２つの保育園の訪問調査を行った。

（１）小国町の取組

①おぐに町総合開発センター

訪問日：平成 21 年 6 月 23 日（火）

訪問目的：体験学習の出来る空間づくりを目指している小国町の取り組みについて知る

インタビューに答えていただいた方：生涯学習課　加藤智佳子さん

（ｉ）おぐに町での体験学習の目的

・小国は自然が豊で「四季」がはっきりしていることが特徴であり、その自然に触れてもらい小国町っていいところだなと思ってほしいから。

・小学生や家族で触れ合うことで絆を深め家庭の中で教育を目指す。

・地域ぐるみで関わったり異年齢と関わることで知識をもつ。

（ⅱ）小国町で行われている体験学習の内容～『子供体験教室』

サマーキャンプ・家族で雑穀料理教室・家族で凧つくり体験・小国の冬遊び

（２）保育園の現状

①白百合保育園

訪問日：平成 21 年 8 月 11 日（火）13：00～15：00

訪問目的：白百合保育園における園児の遊びの実態について知る

（ｉ）年長・年中・年少別に、園内以外でどこで遊ばせているか。

年長：散歩・兵庫舘公園・東原公園（どんぐり公園）・プール、年中：プール、年少：田んぼの方の農園

（ⅱ）園内でどのように遊ばせているか

ホールで赤ちゃんから年長まで、おもちゃなどで遊ばせている。遊ぶ時は先生が必ず付く。

年長：体操・泥遊び・水遊び・プール、年中：ホールで好きな遊び・お部屋で年度・お絵かき・スポンジを箸でつかむ練習、年少：ベランダで盥に水を入れて遊ぶ

（１）あけぼの地区（遠藤・渡部班）

②すみれ保育園

訪問日：平成 21 年 8 月 26 日（水）15：00～17：00

訪問目的：すみれ保育園における園児の遊びの実態について知る

（ｉ）園内での遊びについて

主に以上児組と未満児組に分かれることが多いですが、遊戯室や保育室で合同で遊ぶと、組別に遊ぶ時間とがあります。（朝、夕は合同　日中は組別　が主です）

・ままごと遊び・ブロック遊び・積み木遊び・お絵かき・折り紙・ボール遊び・マット遊び・なわとび・粘土遊び・絵本・お人形遊び・ゲーム遊び・リズム遊び・砂遊び・三輪車・楽器遊び・プール遊び・サッカー遊び　などなど…

（ⅱ）園外での遊びについて

園周辺等の散歩（飯綱神社・小学校周辺・公園・ゆ～ゆ周辺） 園外保育（ワクワクランド・上杉神社・花公園・ひろすけ記念館・りふれ・プラネタリューム）　など

（３）訪問聞き取り調査からわかったこと

小国町教育委員会では、年に６回自然にふれてもらいながら遊びを体験するということをお聞きし、その取り組みの理由として、異年齢との関わりを深めさせられることと、参加対象として親子での参加が多くあり、親子の絆も深めることがわかりました。また、他の町と比べて小国は、自然が豊かで、四季がはっきりしている為その季節に合わせて自然を生かした体験教室ができることが良いことだとわかりました。

保育園の訪問では、体格はいいが、疲れやすいということがわかりました。また、子どものために遊び場がないなかで工夫して遊ぶ場を探している保育士さんの苦労もわかりました。現在の子どもたちは、体は大きくなっているが、精神的には昔と比べるととても幼くなっているようです。遊びの中で共感し合い、時にはお友達との言い争いなども経験しながらお互いに協調することは大きな成長へとつながることがわかりました。

４．アンケート調査

（１）調査目的

小国高校の生徒とその家族を中心に小さいときどんな遊びをしていたかアンケート調査および分析を行い、年齢や世代によってどんな違いがあるかを知る。

（２）調査期間

平成 21 年 6 月～7 月

（３）調査対象

小国高等学校　1～3 学年生徒とその家族

（４）アンケート内容

幼児期（2～5 歳）学童・思春期（6～15 歳）の各期について以下の項目について問うアンケートとし、生徒本人と家族に回答してもらった。

①よく遊んだ遊びの名前は何ですか。②よく遊んだ場所は次のどこですか。

③誰とよく遊びましたか。④何人でよく遊びましたか。

⑤どんな年齢の人とよく遊びましたか。⑥遊びを教えてくれた人は誰ですか。

⑦昔の遊び・現代の遊びについて何か感じていること（自由記載）

（５）アンケート結果

生徒用　配布（135）枚、回収 77 枚（回収率 57%）

家族用　配布（270）枚、回収 106 枚（回収率 39%）

結果は、以下の表と図に示した。

①小国高校生徒のアンケート結果

年齢は 15 歳 9 名（男 2、女 7）、16 歳（男 3、女 16）、17 歳（男 16、女 15）、18 歳（男 5、女 8）で男子 27 名、女子 48 名で総数は 77 名（うち性別無回答 2 名）であった。

表1. 遊びの種類（ﾍﾞｽﾄ10）

幼児期	学童期
鬼ごっこ（17%）	鬼ごっこ(13%)
かくれんぼ(16%)	球技(13%)
遊具(15%)	ゲーム(13%)
積木(12%)	おしゃべり(13%)
おままごと(12%)	どろけい(11%)
だるまさんがころんだ	かくれんぼ(10%)
折り紙(9%)	パソコン(9%)
川遊び(6%)	一輪車(9%)
その他(3%)	ごっこ遊び(5%)
山遊び(0%)	その他(2%)

表2. 遊びの場所（ﾍﾞｽﾄ7）

幼児期・学童期共通の回答	
遊び場所	遊び相手
室内（28%）	同級生（33%）
公園（25%）	近所の子ども（26%）
校庭（13%）	兄弟（20%）
川（12%）	親戚の人（8%）
近所の空き地（11%）	親（7%）
庭（6%）	祖父祖母（5%）
山（5%）	その他（0%）

分析の結果、私たち高校生世代の遊びと、私たちの家族の世代（４０～７０歳代の方々）では遊びの内容が違うことがわかりました。高校生世代の小さいころの遊びは、主にもともとある道具を使っていたり室内で遊ぶことが多いのですが、家族の世代は遊ぶ道具から手作りで作り体を使ったあそびが多いことに気づきました。しかし、今の子どもたちは遊び道具が何でもあるので、工夫をして遊ばなくなってしまっています。ですので、保育士が考えた遊びに興味をもたせるのが大変だということがわかりました。高校生世代の幼児期と学童期ともに一番遊んだ遊びの種類が鬼ごっこであり、現在子供の遊びの中心となっているゲームで遊ぶという子供は、学童期に１３％いるだけでした。ここから当時の小国町の高校生世代の小さいころは、ゲーム中心の遊びよりも体を使った遊びをしていることがわかりました。

５．遊びマップ製作のためのフィールドワーク

小国高等学校を中心として、５ｋｍ圏内でどのような遊び場所があるかを３つのグループに

（1）あけぼの地区（遠藤・渡部班）

小国町立病院やぬくみの里､アスネットなどがあります｡小国病院やぬくみの里の敷地内は、池やサイクリングコース、川や原っぱもあり遊べるところがあります。

アスネットは野球場・グラウンド・テニスコートなどのスポーツ施設があり、さまざまな運動が可能です。お墓や神社などもありますが、昔と違って今は遊んではいけない場所のようです。踏切などもあるので、注意しなければなりません。

（2）兵庫舘・東原地区（伊藤・斎藤班）

兵庫舘公園・東原公園周辺は住宅地と田んぼで車が多く、空地は少ないためあまり遊ぶ場所はありません。しかし道端には、花や栗の木、柿木などがあります。公演は道路に囲まれているところにあり､周囲の車は危険ですが､フェンスに囲まれた中はブランコ､すべり台、シーソー、砂場などの遊具がたくさんあり、水飲み場やトイレもあって安心して遊べます。犬や猫もたくさんいました。

（3）岩井沢地区（平田・長谷川班）

総合センターや教育センターは少し遊ぶ場所がありますが、他はあまり遊べるところはありません。町の体育館の裏などは河原がありますが、危険という立て札で遊ばないように注意を呼び掛けています。学校から１時間以上離れたけんしゃ山や健康の森まで行くと大自然に囲まれた最適の遊び場所があります。川の水もきれいで栗やドングリもたくさん拾えます。

（4）遊び場マップ完成

←遊びマップ（大判用紙１枚）

４．成果や今後の課題

遊びマップ制作にあたって、『キケン！』『立ち入り禁止！』などの看板が多く、小さな子供たちだけで遊べるような場所は少なくなっているようでした。そのなかでも厳選して遊び場所を選ぶのはとても苦労しました。小国町にはこんなにも自然がたくさんあるのに子ども達が安全に遊べる場所が少ないということが分かりました。小国町でさえもこの状況であるのなら、ビルだらけの町ではもっと遊び場がないと思いました。今後はもう一度自分の住む町の良さを見つめなおし、子供達のために遊びの範囲を広げてあげることが課題です。そして心も体も豊かな子供であふれるといいなと思います。

最後に、調査にご協力いただいた方々、ありがとうございました。

小国町の展望